

平成 19 年度 文部科学省選定 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム

市民社会における リーダーシップ養成支援

最終報告書



目次

はじめに	大阪大学学生支援プログラム事業推進責任者 医学系研究科 教授 大和谷 厚	1
------	---	---

プログラムについて

プログラムの概要	3
趣旨・目的	3
プログラムの実施計画	4
プログラムの実施体制	6

実施状況

合宿研修	9
その他	17

成果報告と広報

ウェブサイト	22
機関誌『Kaeru 通信くりふ』	22
新聞等の掲載記事	23

人材育成の成果

市民社会における活動のネットワーク	26
① ナレッジ・カフェ・プロジェクト ステューデント・コモンズ物語 大学教育実践センター 教授 木川田 一榮	27

②Vision Navigation Seminar	
学生団体 VINAS	31
③総長ラウンド 2010	
総長ラウンド実行委員会	32
④定期交流会	
学生団体 そこまでやって委員会（中間支援組織）	33
⑤学生支援・学生活動フォーラム「阪大見本市」	
学生団体 そこまでやって委員会（中間支援組織）	34
⑥石橋キャンパスプロジェクト	
学生団体 石橋×阪大、石橋商店街	35
⑦大阪・ミナミ活性化プロジェクト～ミナミ CLEAN プロジェクト～	36
⑧北ヤード・ナレッジ・キャピタルプロジェクト～大阪に元気創造拠点をつくろう！	37
⑨社会起業支援サミット 2009 in 大阪	
社会起業支援サミット 2009 in 大阪 運営委員会	38
⑩学生団体 Scientthrough	39
⑪大阪大学パンキョー革命推進チーム	40

外部からの評価

大阪大学生の市民社会におけるリーダーシップについて	
「ナレッジキャピタルにおけるインターンシップ活動を通じて思うこと」	
株式会社ナレッジ・キャピタル・マネジメント	
プロジェクト・マネージャー 棚倉 進	42

参加者からの評価

市民社会におけるリーダーシップ養成支援に参加して	
理事・副学長 門田 守人	45

学生支援 GP「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」報告 コミュニケーションデザイン・センター 准教授 本間 直樹 ……	47
学生支援 GP の取り組みに参加して 言語文化研究科 准教授 井元 秀剛 ……………	48
「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」に参加して 大澤法律事務所 弁護士 大澤 恒夫 ……………	50
「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」に関わって 独立行政法人情報通信研究機構 上席研究員 下條 真司 ……………	52
挑 戦 と 変 化 工学研究科生命先端工学専攻 洪 達超 ……………	54
「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムに参加して 人間科学部人間科学科 前田 有香 ……………	56
学生支援プログラムから学生部事務職員が得たもの 学生部キャリア支援課長 脇 成吾 ……………	57
「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」に立ち上げから関わって 株式会社リンクアンドモチベーション シニアコンサルタント 檜原 洋平 ……………	59

今後の展開

来年度以降の展開 ……………	62
おわりに 大学教育実践センター 教授 木川田 一榮 ……………	63

はじめに

大阪大学学生支援プログラム事業推進責任者
国立大学法人大阪大学 医学系研究科 教授
大和谷 厚

平成 19 年度の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」に採択いただいた「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムも最終年度を迎え、ここに過去 4 年間の実績報告をさせていただくこととなりました。

このプログラムは、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、「教養・デザイン力・国際性」を教育目標とし、確かな基礎学力と専門知識をもつ「しなやかな専門家」を育成しようとしている大阪大学が、社会的教養と健全な判断力により常に広い視野の中で適切な行動を選択できる **Common Sense** をもち、同時に、**Common Sense** に適切な懐疑心をもち、常に自己を振り返り検証することのできる「阪大スタイルの市民社会のリーダー」の養成支援を目的として、企画立案しました。

この取り組みの中心となるのは学年別に実施した 3 泊 4 日のワークショップ型合宿研修で、1 年次対象に「世界と日本そして市民としての私」をテーマに「自分を知る」ことを、2 年次対象に「市民との対話と協創」をテーマに「他者と関わる」ことを、そして、3 年次対象には「市民社会変革型リーダーの使命と役割」をテーマに「社会を意識する」ことを、自ら考えるようにプログラムを組み立てました。この 4 年間で全ての学部から延べ 285 名の学生が自主的な応募により参加し、担当講師からの答えのみつからない問いかけを真摯に受け止め、真剣に議論してくれました。また、延べ 18 名の 4 年次や院生となったプログラム参加者はメンターとして研修に参加してくれました。

この研修の成果は参加した学生の今後 10 年、20 年後の市民社会における活動実績により評価されるべきものかもしれませんが、すでにキャンパス内外で多くの自主的な活動を展開してくれ、「市民社会でコアとなり、何にでも興味をもち、積極的に取り組む姿勢をもつ人材」、大阪弁でのいい意味での「いちびり」が確実に育ってきたと考えております。今後も彼らを中心に支援の輪が広がっていくものと期待しています。

加えて、この合宿研修には学生部職員がほぼ全員、交代でファシリテーターとして参画し、また、講師をお願いした教員には通常の講義では様々な制限により実施できないと思われる大胆で、ある意味で冒険的な学生参加型の講義を展開していただきました。これにより、本プログラムのもうひとつの目的として考えた学生部職員のスタッフディベロップメント（SD）と教員のファカルティディベロップメント（FD）による間接的學生支援にも大いに資することとなったと考えております。

最後になりましたが、本プログラムの企画から運営までご支援ご協力をいただいた多くの方々にお礼を申し上げ、報告書の序とさせていただきます。

プログラムについて

プログラムの概要

大阪大学は、適塾と懐徳堂を源流とし、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに「教養・デザイン力・国際性」を教育理念とし、市民社会にロイヤリティをもち、リーダーシップを発揮する「阪大スタイル」の人材育成を目指している。今回の取り組みは「市民社会でのリーダー」開発を目指し、まずクラスやサークルのリーダーとなる学生を重点的に支援し育成し、この学生が核となり支援の輪が連鎖上に広がることにより、学生全体の意識の向上とレベルアップを図るためのプログラムを開発し実施する。対象は各学年で50名以下、総数200名以下とし、公募と推薦により選定する。このプログラムの実施は学生部学生支援課及びキャリア支援課の事務職員が主体となって担当し、大学教育実践センターやコミュニケーションデザイン・センターの教員が積極的に協力する。また、プログラム開発には人材開発で実績のある民間コンサルティング企業のノウハウを利用する。



趣旨・目的

(1) 新たな取り組みを実施するに至った動機と背景

大阪大学は、適塾と懐徳堂を源流とし、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに「教養・デザイン力・国際性」を教育の基本理念とし、市民社会にロイヤリティをもち、市民社会でリーダーシップを発揮する「阪大スタイル」の人材の育成を目指している。



一方、在籍する学生は極めて多彩で多様であり、これらの学生に多彩で多様なきめ細やかな支援を実施することを心がけ、その拡充を図ってきた。しかし、学生にとっては、ある意味「受け身の支援」であると言わざるを得ない。そこで、「学生の主体性」を重視した新たな支援の構築が「阪大スタイル」の学生を育成するために緊要であると考え、ボトムアップ的な支援を展開するのではなく、クラスやサークル、ボランティアグループなどで中心となって活動している学生を支援し、彼らの自立とリーダーシップを育成し、この学生が核となり支援の輪を広げ、連鎖のスパイラルにより学生全体のレベルアップを図り市民社会のリーダーたる阪大スタイルの人材を輩出しようと考えた。

(2) 新たな取り組みの大学等における意義

今回の取り組みでは、学生自らが主体的に考え、行動することこそが本来的な、学生のリーダーシップ開発につながると考え、大学側からの一方的な情報提供という受け身の手法ではなく、気づき型、実践型のプログラムを用い、学生自らが主体的に活動を行い、それをサポートする立場としての大学の位置づけを考えている。大阪大学は学生を大学運営のパートナーと考えており、今回の取り組みにおいても、大学と学生と一緒にプログラムを創りあげていく姿勢を大事にしていく。こうした姿勢の結果として、学生の「市民社会でのリーダーシップ」を引き出せる究極の大学と学生のパートナーシップが結ばれ、大学と学生と社会との関係が築かれ、「阪大スタイル」が定着し、市民社会における大学の新たな位置づけを創り出すことができると考えている。

大阪大学では、「社会あるいは市民が大学に期待するニーズと、大学が提供可能なシーズとのマッチング」を活動理念とする「大阪大学 21 世紀懐徳堂」を核として、市民社会に生きる大阪大学を目指している。今回の学生支援プログラムは大学としてのこの大きな方向性に合致するものであり、大学としての意義も大きい。

プログラムの特徴	
1	クラスやサークルで核となる学生をリーダーとして養成 これまでの全員参加型のものではなく、参加意欲の高い学生を支援する
2	気づき型、実践型の参加者主導の対話型プログラム 一方的な知識伝達型の研修ではなく、参加者同士の議論を通じて個々の気づきを創り出す
3	メンター制度の構築 学生メンターを養成することにより、フォロー体制を構築する
4	学生部事務職員の積極的関与 事務職員が学生支援の主体としてコミットする
5	学内および企業の専門知を動員したプログラム開発・運営 専門知により、4ヵ年計画によって常にプログラムのアップデートをしていく

プログラムの実施計画

(1) 新たな発想や独自の創意工夫（他にない特色）について

今回の取り組みは「市民社会でのリーダーシップ」の開発を主眼においた、学部 1 年次から 4 年次までに以下の全 3 回のリーダーシップに特化したプログラムを開発し実施する。対象とする学生は学部学生の約 1%~2%、各学年で 50 名以下、総数 200 名以下である。対象学生は公募により選定する。クラス代表、サークルやボランティアグループのリーダーの学生などを想定している。このプロジェクトの実施は学生部学生支援課及びキャリア支援課の事務職員が主体となって担当し、教員は実施にあたって積極的に協力する。また、プログラム開発には人材開発で実績のある民間コンサルティング企業のノウハウを利用し、プログラム実施においても協力を仰ぐ。

対象学生	
◆学部学生の1~2% (各学年50名以下)	⇒主にクラスやサークル、ボランティアなどで中心となって活動している学生
◆公募による選定	⇒意欲ある主体的な学生のリーダーシップを養成支援

対象学生	
第1回 合宿型ワークショップ 「無難と日本を志す 専攻としての私」	主体的な活動 1日型の振り返りイベント
第2回 合宿型ワークショップ 「専攻と対話と活動」	
第3回 合宿型ワークショップ 「市民社会変革型リーダー の使命と役割」	
学生メンターとして、自らの経験を学生に還元する	

プロジェクトは学部学生が卒業するまでに 3 回の 3 泊程度の合宿形式のワークショップ型の研修（OUDSL : Osaka University Development Seminar for Leaders）を実施する。

- 1 年次：世界と日本そして市民としての私
(取り巻く環境の課題認識と世界と自己との関係性の構築)
- 2 年次：市民との対話と協創
(コラボレーション技術とソーシャル・ネットワーク形成の習得)
- 3 年次：市民社会変革型リーダーの使命と役割
(市民社会でのリーダーとしての志 (Aspiration)・信念 (Belief)・コミットメント (Commitment) の形成と実践)

研修では明確な目標設定をし、問題意識を共有し、それぞれの課題を持ち帰り、自身の所属する組織でその課題を実践する。結果は次回の研修で報告し議論する。こうしてリーダーとしてのブラッシュアップを、各セミナーを経由するスパイラルな構造により実施する。意欲の高いリーダーが育成されることにより、彼らがロールモデルとなり支援の連鎖が形成され、学生全体の活性化への波及効果が期待できる。



独自の創意工夫は、以下の 5 点である。

(i) プログラムの手法

一方的な知識伝達型ではなく、気づき型、実践型の双方向的なプログラムである。

(ii) 対象者への関わり方

大学主導で参加者に一方的に与えるプログラムではなく、参加者主導で自主的に活動していけるプログラムを目指す。

(iii) 支援対象者とその選抜方法

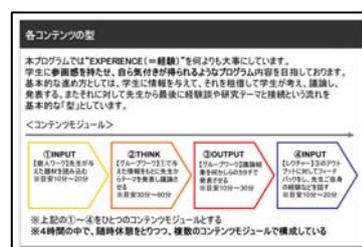
全学生を支援対象者とするのではなく、現在、クラスやサークルでリーダーを担っている学生や、大阪大学全学年からの公募や教職員からの推薦により、核となりうる学生を対象として重点的に支援し、この学生から、さらに支援の輪が広がることを期待する。

(iv) メンター制度の構築

学部 4 年次や大学院生の希望者にメンターとして、後輩の育成に関わる制度を設け、下級生参加者の精神的支柱の形成、上級生参加者の更なる成長を期待する。

(v) 事務職員のプログラムへの積極的関与と民間活力の利用

これまで学生支援の裏方であった学生部事務職員が積極的にかつ主体的に学生支援に参加する計画である。さらに、民間のコンサルティング企業のノウハウを利用することにより、新たな視点での支援を展開できる。



(2) 他大学の参考となるポイント

このプログラムは、すでに基礎的な学生支援の体制が構築できている国立の総合大学において、さらに一步踏みだした支援を行うための提案である。また、私立大学では事務職員が支援のフロントとしての役割を担っているが、国立大学法人では、未だに事務的サポートに徹していることを打破するプログラムでもある。

また、学生全体へのボトムアップを目指した支援ではなく、リーダー養成支援を明確に打ち出したプログラムで、学生がさらに学生を支援する支援の連鎖を構築しようとするプログラムでもある。

このため、大阪大学では「阪大スタイル」を明確にするため「市民社会でのリーダーシップ開発」をテーマとしたが、他大学でそれぞれの明確な目標を設定することにより、様々な応用が可能と考えられる。

プログラムの実施体制

(1) 各年度の実施計画について

実施計画のポイントとしては、初年度は学生メンターのインフラを構築するために学部1年次から3年次までの全3回のプログラム制作に着手し、実施した。平成20・21年は各学年ごとのテーマにそった講師を選定し、合宿研修の向上を図った。最終年度は、3年間実施し改良した各学年の1・2・3年次の合宿研修の各プログラムを完成させた。

(2) 実施体制について

学生部学生支援課とキャリア支援課及び学生生活委員会が中心となって推進していく。また、大学教育実践センター及びコミュニケーションデザイン・センターの教員は各プログラムに参加し指導的役割を果たすと同時に、本プログラムで蓄積した知見やノウハウを教養教育にフィードバックしていくことで、大阪大学の教育目標をより効率・効果的に実現し、地域との連携をも図っていく。実際のプログラム開発にあたっては、民間の人材育成コンサルティング会社のノウハウを利用するが、企業人育成とは考え方が大きく違う点が多々あるので、十分な打合せと試行を積み重ねた上で実施していく。

(3) 人的・物的・財政的條件の整備状況及び予定について

本プログラムにおいて重要なのは、人的リソースである。

第一に学生メンター制度については本学のティーチングアシスタント制度を利用して、日々の相談やフォローをしていくことが可能である。第二にリーダーシップ開発や教育手法に関して、民間コンサルティング会社の経験やナレ



ッジを積極的に活用し、より効果のあるプログラムをスピーディーに制作していく。第三に学生部事務職員が主導的役割を果たし、プログラム実施において教員や学生のコーディネートにあたる。

< 「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム事例集」 より一部抜粋 >

実 施 状 況

平成19年度実施内容

テーマ	<p><u>「まず、形にする」</u> ⇒初年度から完成版を創ることは不可能であり、PDCAをまわす観点でも、まず「形」にすることを最優先に実行。</p>
新たな試み	<ul style="list-style-type: none"> ◆2泊3日で、1年次から3年次まで計3回トライアルで実施。 ◆場所は非日常感を演出する意味で丹波篠山の合宿施設を選択。 バスで大学から移動。 ◆謝金を支払い、学生を募集。 ◆初日にチームビルディング、最終日に振り返り、中日に教員陣による参加型プログラム。 ◆各グループに職員のファシリテーターが原則的につく。
申し送り事項	<ul style="list-style-type: none"> ◆2泊3日では短いのでは。実施日程の検討。 ◆職員のファシリテーターをMUSTにする否かの検討。 ◆感性を磨くようなコンテンツが少ない。 ◆深夜まで議論することの是非。

1年次対象の合宿型ワークショップ 「世界と日本そして市民としての私」

	1日目 2/22(金)	2日目 2/23(土)	3日目 2/24(日)
9:00 ～ 12:00	移動	「場のリーダーシップ」 平田オリザ 教授	「総括」 木川田一榮 教授
昼食			
13:00 ～ 15:00	「オリエンテーション/イントロダクション」 学生部/大和谷厚 教授 (13:00～13:30) 「自己紹介ワーク」 「チームビルディング」 (13:30～15:00)	「言葉のしくみ」 井元秀剛 准教授	「目標設定(エンディング)」 リンクアンドモチベーション
休憩			
15:30 ～ 17:30	「未来のニュース番組を作れ！」 リンクアンドモチベーション (15:30～18:00)	「国際性の本質とは？」 小泉潤二 理事・副学長	移動
懇親会 (18:00～19:00)		夕食	
18:30 ～ 21:00	「未来のニュース番組を作れ！ 続き:発表」 リンクアンドモチベーション (19:00～21:00)	「阪大の歴史」 高杉栄一 理事・副学長	

2年次対象の合宿型ワークショップ「市民との対話と協創」

	1日目 3/28(金)	2日目 3/29(土)	3日目 3/30(日)
9:00 ～ 12:00	移動	「言語学」 金水敏 教授	「総括」 木川田一榮 教授
昼食			
13:00 ～ 15:00	「オリエンテーション/イントロダクション」 学生部/大和谷厚 教授 (13:00～13:30) 「自己紹介ワーク」 「チームビルディング」 (13:30～15:00)	「減災教育」 渥美公秀 准教授	「アドバイスクランブル(エンディング)」 リンクアンドモチベーション
休憩			
15:30 ～ 17:30	「無人島脱出」 リンクアンドモチベーション	「クリティカルシンキング」 望月太郎 教授	移動
懇親会 (17:30～18:30)		夕食	
18:30 ～ 21:00	「市民社会」 箕面市長 藤沢純一 氏	「対話」 リンクアンドモチベーション	

3年次対象の合宿型ワークショップ「市民社会変革型リーダーの使命と役割」

	1日目 3/14(金)	2日目 3/15(土)	3日目 3/1(日)
9:00 ～ 12:00	移動	「社会と医療の関係」 門田守人 理事・副学長	「振り返り」 木川田一榮 教授(9:00～10:00) 「ジェンダー」 武田佐和子 理事・副学長(10:00～12:00)
昼食			
13:00 ～ 15:00	「オリエンテーション/イントロダクション」 学生部/大和谷厚 教授 (13:00～13:30) 「自己紹介ワーク」 「チームビルディング」 (13:30～15:00)	「哲学カフェ」 本間直樹 准教授	「アクションプラン策定・アドバイスクランブル (エンディング)」 リンクアンドモチベーション
休憩			
15:30 ～ 17:30	「キョロパッチを創れ！」 リンクアンドモチベーション	「企業と社会」 野城清 教授	移動
懇親会 (17:30～18:30)		夕食	
18:30 ～ 21:00	「交流会」	「OBOGセッション」	

平成20年度実施内容

テーマ	<p><u>「型の模索」</u> ⇒期間の延長や講師の見直し、メンター制の導入、活動時間の最適化など初年度の反省を活かし、あるべき「型」を模索</p>
新たな試み	<ul style="list-style-type: none"> ◆期間を3泊4日に延長 ◆講師枠を広げ、大阪大学内外から多様な講師にプログラムを担当頂く ◆感性に関わるようなプログラムも実施 ◆学生が参加費（主に食事代）を支払う形式に移行 ◆4年次をメンターとして活用 ◆原則としての就寝時間を設定し、朝方へシフト ◆総長ラウンドの実施
申し送り事項	<ul style="list-style-type: none"> ◆プログラムの詰め込みすぎ、参加者に消化不良感が残る。 1日のコマ数の再検討。 ◆初日のチームビルディング進行を職員へ移行。ツールの形式知化が必要。 ◆4年次メンターの積極的な活用。 ◆プログラム後にアクションを起させる仕組みづくり。 ◆テーマと講師のミスマッチを改善し、最適なストーリーを構築。

1年次対象の合宿型ワークショップ「世界と日本そして市民としての私」

	1日目 9/17(水)	2日目 9/18(木)	3日目 9/19(金)	4日目 9/20(土)
	散歩・朝食			
9:00 ～ 12:00	移動	「災害ボランティア活動の最先端から」 渥美公秀 准教授	「小氷期のリーダーシップ」 大垣一成 教授	「総括」 木川田一榮 教授
	昼食			
13:00 ～ 15:30	「オリエンテーション／イントロダクション」 学生部／大和谷厚 教授 (13:00～14:00) 「自己紹介ワーク・チームビルディング」 リンクアンドモチベーション (14:00～15:30)	「言葉のしくみ」 井元秀剛 准教授	「コミュニケーションワークショップ」 平田オリザ 教授	「エンディング」 リンクアンドモチベーション
	休憩			
15:45 ～ 18:00	「チームビルディング」 リンクアンドモチベーション	「共通教育を考える —新生大阪大学・第1期生が考える 共通教育の新たなステージ」 工藤真由美 教授	「国際社会への視点」 小泉潤二 理事・副学長	移動
	夕食			
19:00 ～ 21:00	「哲学カフェ —対話の場のデザイン」 本間直樹 准教授	「ケアについて考える」 西村ユミ 准教授	「異分野連携」 森勇介 教授 北岡康夫 教授 根岸和政 特任研究員	

2年次対象の合宿型ワークショップ「市民との対話と協創」

1日目 8/27(水)		2日目 8/28(木)		3日目 8/29(金)		4日目 8/30(土)	
散歩・朝食							
9:00 ～ 12:00	移動	「チームビルディング」 リンクアンドモチベーション	「相談・交渉を考える」 弁護士 大澤恒夫 氏	「総括」 木川田一榮 教授			
昼食							
13:00 ～ 15:30	「オリエンテーション／イントロダクション」 学生部／大和谷厚 教授 (13:00～14:00) 「自己紹介ワーク・チームビルディング」 リンクアンドモチベーション (14:00～15:30)	「日本語の“美学”」 金水敏 教授	「都市の「生命」」 木多道宏 准教授	「エンディング」 リンクアンドモチベーション			
休憩							
15:45 ～ 18:15	「自己とむきあう／他者とのかかわる」 舞踊家 岩下徹 氏	「緩和ケアとコミュニケーション」 恒藤暁 教授	「ユビキタス時代の街の作り方」 情報通信研究機構 下條真司 氏 (15:45～18:00)	移動			
夕食							
19:00 ～ 21:00	「懇親会」 (18:15～20:00)	「交流会」 (19:15～21:00)	障害のある人たちと共に生きる: 「支援」から「支援と言わない支援」へ 松原崇 助教				

3年次対象の合宿型ワークショップ「市民社会変革型リーダーの使命と役割」

1日目 9/24(水)		2日目 9/25(木)		3日目 9/26(金)		4日目 9/27(土)	
散歩・朝食							
9:00 ～ 12:00	移動	「問うことと考えること」 望月太郎 教授	「コミュニケーションワークショップ」 平田オリザ 教授 (8:30～11:00)	「国政の場から：阪大OBとして」 参議院議員 梅村聡 氏			
昼食							
13:00 ～ 15:30	「オリエンテーション／イントロダクション」 学生部／大和谷厚 教授 (13:00～14:00) 「自己紹介ワーク・チームビルディング」 リンクアンドモチベーション (14:00～15:30)	「共鳴のリーダーシップ」 野村美明 教授	「二セ科学の練習」 菊池誠 教授	「総括」 木川田一榮 教授 (13:00～15:00) 「エンディング」 リンクアンドモチベーション (15:00～15:30)			
休憩							
15:45 ～ 18:15	「チームビルディング」 リンクアンドモチベーション	「社会的要請に応えること」 大阪市立美術館 館長 篠雅廣 氏	「生きることを考える」 門田守人 副学長	移動			
夕食							
19:00 ～ 21:00	「懇親会」 (18:15～20:00)	「総長ラウンド」 鷺田清一 総長 (19:15～21:00)	「交流会」 (19:15～21:00)				

平成21年度実施内容

テーマ	<p>「型の定着」 ⇒過去2年間の経験のふまえ、枠組みを固める。 また、初日のチームビルディングを職員で行うというチャレンジに着手。</p>
新たな試み	<ul style="list-style-type: none"> ◆1回あたりのプログラム時間を4時間にし、原則1日2コマ体制へ。 ◆チームビルディングの内容を形式知化し、進行を職員へ移行。 ◆各回のテーマと講師の最適なマッチング。 ◆4年次メンターの積極的な巻き込み。 ◆研修後のアクションを最大化させる仕組み。
申し送り事項	<ul style="list-style-type: none"> ◆チームビルディングの精度をより高めていく。 ◆講義の品質にばらつきがあるので、アンケートをもとに各講師にフィードバックを行い、さらにプログラムの品質を高めていく。

1年次対象の合宿型ワークショップ「世界と日本そして市民としての私」

	1日目 8/17(月)	2日目 8/18(火)	3日目 8/19(水)	4日目 8/20(木)
	散歩・朝食			
8:00 ～ 12:00	移動	「懐疑思考入門」 菊池誠 教授	「相談に応じることから 『ケアを考える』」 西村ユミ 准教授	「演劇ワークショップ」 平田オリザ 教授
昼食				「エンディング」
14:00 ～ 18:00	「オリエンテーション/イントロダクション」 学生部/大和谷厚 教授 (13:00～14:30) 「チームビルディング」 リンクアンドモチベーション (14:30～18:30)	「他の人々が見る私たち・ 私たちが見る他の人々」 小泉潤二 理事・副学長	「考えることーことばの仕組み」 井元秀剛 准教授	リンクアンドモチベーション (13:00～15:00) 「アンケート」 (15:00～15:30)
夕食				移動
夜 イベント	「懇親会」 (18:30～20:30)	「安全・安心とリスクを考える」 山本仁 教授 富田賢吾 講師 (19:00～22:00)	「総括」 木川田一榮 教授 (19:00～21:00)	

2年次対象の合宿型ワークショップ「市民との対話と協創」

		1日目 9/2(水)	2日目 9/3(木)	3日目 9/4(金)	4日目 9/5(土)
散歩・朝食					
8:00 ～ 12:00	移動		「人とつながり、人をつなぐ -相談・交渉を考える」 弁護士 大澤恒夫 氏	「障害と社会」 松原崇 助教	「総括」 木川田一榮 教授
昼食					
14:00 ～ 18:00	「オリエンテーション／イントロダクション」 学生部／大和谷厚 教授 (13:00～14:30) 「チームビルディング」 リンクアンドモチベーション (14:30～18:30)	「少しずつ自由になる為に -自己と向き合う／他者とかわる」 舞踊家 岩下徹 氏	「ユビキタス時代の街の作り方」 情報通信研究機構 下條真司 氏	「エンディング」 リンクアンドモチベーション (13:00～15:00) 「アンケート」 (15:00～15:30)	移動
夕食					
夜 イベント	「懇親会」 (18:30～20:30)			「哲学カフェ -とともに考えるとほ」 本間直樹 准教授 (19:00～22:00)	

3年次対象の合宿型ワークショップ「市民社会変革型リーダーの使命と役割」

		1日目 9/16(水)	2日目 9/17(木)	3日目 9/18(金)	4日目 9/19(土)
散歩・朝食					
8:00 ～ 12:00	移動		「地域活動のツール」 渥美公秀 准教授	「生きることを考える」 門田守人 理事・副学長	「総括」 木川田一榮 教授
昼食					
14:00 ～ 18:00	「オリエンテーション／イントロダクション」 学生部／太刀掛俊之 准教授 (13:00～14:00) 「チームビルディング」 学生部／リンクアンドモチベーション (14:00～18:00) 「自己認識・気づき」 木川田一榮 教授 (18:00～18:30)	「アイデンティティ論から 都市の生命に迫る」 木多道宏 准教授	「社会的要請に応えること」 大阪市立美術館 館長 篠雅廣 氏	「エンディング」 リンクアンドモチベーション (13:00～15:00) 「アンケート」 (15:00～15:30)	移動
夕食					
夜 イベント	「懇親会」 (18:30～20:30)		「信念・コミットメントの ゆらぎを考える」 瓜生崇 氏 福岡晶子 氏 (19:00～21:00)		

平成22年度実施内容

テーマ	<p><u>「完成度を高める」</u> ⇒これまでの3年間の行動と反省をふまえ、「型」の精度を高め、完成版を目指す。</p>
新たな試み	<ul style="list-style-type: none"> ◆チームビルディングを職員のみで完全に進行。 ◆プログラム細部のブラッシュアップ。 ◆アンケートをもとに各講師に修正点をフィードバック。 ◆できるだけ一方的な講義を無くし、双方向参加型のプログラムを徹底。
申し送り事項	<ul style="list-style-type: none"> ◆規模を最適化する中での「継続的な実施」。

1年次対象の合宿型ワークショップ「世界と日本そして市民としての私」

	1日目 8/17(火)	2日目 8/18(水)	3日目 8/19(木)	4日目 8/20(金)
	散歩・朝食			
8:00 ～ 12:00	移動	「ケアについて考える」 西村ユミ 准教授	「懐疑的に考えること」 菊池誠 教授	「総括」 木川田一榮 教授
	「オリエンテーション／イントロダクション」			「エンディング」
13:30 ～ 17:30	学生部／太刀掛俊之 准教授 (13:00～14:00) 「チームビルディング」 学生部／リンクアンドモチベーション (14:00～18:00) 「自己認識・気づき」 木川田一榮 教授 (18:00～18:30)	「他者を語る 自己を語る ～ビルマの事例から 女たちはどのように語られてきたか」 南田みどり 教授	「ことばの仕組み」 井元秀剛 准教授	リンクアンドモチベーション (13:30～15:30) 「アンケート」 (15:30～16:00)
	「移動」			
	夕食			
19:00 ～ 22:00	「懇親会」 (18:30～20:30)	「安全・安心とリスクを考える」 毎日新聞大阪本社 野田武 氏 山本仁 教授 富田賢吾 講師	「未知との出会い、 既知を探る試み ～ダムタイプ《S/N》 記録映像の上映を通じて」 木ノ下智恵子 特任准教授	

2年次対象の合宿型ワークショップ「市民との対話と協創」

	1日目 9/13(月)	2日目 9/14(火)	3日目 9/15(水)	4日目 9/16(木)
		散歩・朝食		
8:00 ～ 12:00	移動	「相談・交渉を考える -人をつながり、人をつなぐ」 弁護士 大澤恒夫 氏	「障害者支援は誰のため？」 松原崇 助教	「総括」 木川田一榮 教授
	「オリエンテーション/イントロダクション」 学生部/太刀掛俊之 准教授 (12:30～13:00) 「チームビルディング」 学生部/リンクアンドモチベーション (13:00～14:00) 「少しずつ自由になるためにー 自己とむきあう/他者とかわる」 ※動きやすい服装で受講してください。 舞踊家 岩下徹 氏 (14:00～18:00) 「自己認識・気づき」 木川田一榮 教授 (18:00～18:30)	昼食		「エンディング」 リンクアンドモチベーション (13:30～15:30) 「アンケート」 (15:30～16:00)
13:30 ～ 17:30		「臨床哲学: ともに考える喜び」 本間直樹 准教授	「日本語の将来をみんなで考える」 金水敏 教授	移動
		夕食		
19:00 ～ 22:00	「懇親会」 (18:30～20:30)	「哲学カフェ」 本間直樹 准教授 (19:00～20:30)	「次世代 スーパーコンピューティング 技術の推進」 情報通信研究機構 下條真司 氏	

3年次対象の合宿型ワークショップ「市民社会変革型リーダーの使命と役割」

	1日目 9/27(月)	2日目 9/28(火)	3日目 9/29(水)	4日目 9/30(木)
		散歩・朝食		
8:00 ～ 12:00	移動	「社会と安全」 太刀掛俊之 准教授	「私の大切なもの」 門田守人 理事・副学長	「総括」 木川田一榮 教授
	「オリエンテーション/イントロダクション」 学生部/太刀掛俊之 准教授 (13:00～14:00) 「チームビルディング」 学生部/リンクアンドモチベーション (14:00～18:00) 「自己認識・気づき」 木川田一榮 教授 (18:00～18:30)	昼食		「エンディング」 リンクアンドモチベーション (13:30～15:30) 「アンケート」 (15:30～16:00)
13:30 ～ 17:30		「自分の頭で考える、 自分の眼を信じる、 《偉い人》は信用しない」 大阪市立美術館 館長 篠雅廣 氏	「アイデンティティ論から 都市の生命に迫る」 木多道宏 准教授	移動
		夕食		
19:00 ～ 22:00	「懇親会」 (18:30～20:30)	「医療現場から国政へ」 参議院議員 梅村聡 氏	「信念・コミットメントの ゆらぎを考える」 瓜生崇 氏 福岡晶子 氏	

リーダーズ・アSEMBリー (L・A)

日時
場所

平成19年12月1日（土）14：30～17：30

ユニトピア篠山（兵庫県篠山市）

目的

阪大スタイルを知る。
市民社会におけるリーダーシップ養成支援の認知。
リーダーとしての活動内容の振り返り、リブランニング。

大学教育改革プログラム合同フォーラム・ポスターセッション出展

日時
場所

平成20年2月9日（土）

パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）

目的

文部科学省が開催した「大学教育改革プログラム合同フォーラム」に出展した。
「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」の取り組み等について情報提供を行うため、ブースにてポスターの掲示、資料の配布、プログラム内容の説明等を行った。

平成19年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」意見交換会

日時
場所

平成20年2月29日（金）

ホテルモントレ ラ・スール（大阪府大阪市）

目的

文部科学省が開催した「平成19年度『新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム』意見交換会」にて、「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」のプログラム内容を紹介した。

第1回 総長ラウンド

日 時

平成20年4月26日（土）13：00～16：00

場 所

大阪大学 大学教育実践センター イ号館 21世紀懐徳堂

目 的

鷺田清一総長と参加学生の対話。
学年間のコミュニケーション。

リーダーズ・アセンブリー（L・A）

日 時

平成20年12月6日（土）14：00～16：00

場 所

ユニトピア篠山（兵庫県篠山市）

目 的

阪大スタイルを知る。
市民社会におけるリーダーシップ養成支援の認知。
モチベーションとリーダーシップ。

第2回 総長ラウンド

日 時

平成21年1月10日（土）10：00～16：00

場 所

大阪大学 大学教育実践センター イ号館 イ講堂

目 的

鷺田清一総長と参加学生の対話。
学年間のコミュニケーション。

合宿研修参加学生がいちょう祭で企画を実施

日時
主催

平成21年5月1日（金）～2日（土）
学生支援GP そこまでやって委員会

目的

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」の広報活動。
参加学生の自主的活動を支援すると同時に、支援の輪を広げる。

リーダーズ・アセンブリー（L・A）

日時
場所

平成21年12月5日（土）8：15～20：00
大阪大学 大学教育実践センター イ号館 イ講堂

目的

阪大スタイルを知る。
市民社会におけるリーダーシップ養成支援の認知。
モチベーションとリーダーシップ。

報告会

日時
場所

平成22年2月20日（土）9：30～16：30
大阪大学 大学教育実践センター イ号館 21世紀懐徳堂

目的

合宿研修参加者の活動の事例報告。
「総長ラウンド実行委員会」の活動報告。
学年間のコミュニケーション。

Vision Navigation Seminar

日時
主催
平成22年4月8日（木）13：00～19：00
学生団体「VINAS」

目的
大学生生活を有意義に過ごすための“目的”を描く／考えるきっかけの提供。
将来（どのレベルかは個人次第）の理想像を描くきっかけの提供。

第3回 総長ラウンド

日時
場所
平成22年年6月22日（火）16：30～18：30
大阪大学 大学教育実践センター スチューデント・コモンズ 開放型セミナー室

目的
鷺田清一総長と参加学生の対話。
学年間のコミュニケーション。

リーダーズ・アセンブリー（L・A）

日時
場所
平成22年12月4日（土）8：15～20：00
大阪大学 大学教育実践センター イ号館 イ講堂

目的
阪大スタイルを知る。
市民社会におけるリーダーシップ養成支援の認知。
モチベーションとリーダーシップ。

成果報告と広報

ウェブページ

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムの活動を学内外に広く周知するため、ウェブページを開設している。

本プログラムの担当者のあいさつをはじめとし、合宿研修やイベントの告知や、大阪大学学生支援 GP 機関誌『Kaeru 通信くりふ』の掲載などを行った。

http://www.osaka-u.ac.jp/jp/campus/leadership_GP/index.htm

大阪大学 学生支援プログラム
「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」
 ～「阪大スタイル」育成プログラムの開発～
平成19年度文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に採択されました。

HOME
 あいさつ
 プログラムの目的
 プログラムの概要
 活動状況
 行事予定
 お問い合わせ
 リンク
 News Letter

1年次プログラム
 2010年8月17日(火)～8月20日(金)
 2年次プログラム
 2010年9月13日(月)～9月16日(木)
 3年次プログラム
 2010年9月27日(月)～9月30日(木)

News & Topics

2010.9.27～9.30 [3年次合宿研修\(22年度\)実施](#)
 2010.9.13～9.16 [2年次合宿研修\(22年度\)実施](#)
 2010.8.17～8.20 [1年次合宿研修\(22年度\)実施](#)
 2010.8.16 [22年度合宿研修 2年次合宿研修参加者募集終了](#)
多謝のご声かけがとうございました。
 22年度合宿研修 2年次合宿研修参加者追加募集決定
 2010.7.15 [22年度合宿研修 第2回 参加者募集終了](#)
多謝のご声かけがとうございました。
 2010.6.22 [総長ラウンド\(第3回\)実施](#)

[BACK NUMBER](#)

機関誌「Kaeru 通信くりふ」

大阪大学学生支援 GP の活動を紹介する機関誌を年 4～6 回不定期に発行した。

合宿研修の報告、合宿研修終了後の本プログラムの参加学生の活動などを紹介した。学内に機関誌を配布することにより、本プログラムの活動状況を広く周知することができた。

また、本プログラムの合宿研修に参加いただいた先生にご寄稿いただき、本プログラムの活性化につながった。

大阪大学 学生支援 GP
 News Letter
Kaeru通信 No.1
 くりふ Change Return Incubate Frog **創刊号**

☆2008年12月5日発行 ☆隔月発行
 ☆発行/大阪大学学生部キャリア支援課 http://www.osaka-u.ac.jp/jp/campus/leadership_GP/index.htm
 ☆編集/大阪大学学生部キャリア支援課 〒565-0871 吹田市山田丘1-1

詳しくは5ページへ
総長ラウンド開催決定
 または「[総長ラウンド](#)」検索

2009.1.10 (土)

THE KEY PERSON
 『Kaeru 通信』発行にあたって
 大和谷 厚 教授 — 2・3
 GPとは・・・ほか — 4
 総長ラウンド開催決定 — 5

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラム
 合宿研修レポート
 1年次対象プログラム — 6・7
 2年次対象プログラム — 8・9
 3年次対象プログラム — 10・11

MESSAGE・・・ほか
 関係者 学生部長 — 12

鷺田総長と70人の学生が対話 リーダーシップ養成支援「総長ラウンド」

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援『総長ラウンド』が4月26日に21世紀懐徳堂・多目的スタジオで行われた。70人の学生が参加し、鷺田総長と対話した。

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」は文科省が選定する学生支援GPの1つ。「総長ラウンド」には春休み中に行われた研修に参加した学生が出席した。

グループディスカッションでは「他」己紹介が行われた。これは学生が学生をインタビューし、インタビュー相手を紹介するというもの。



鷺田総長と意見を交わす学生ら

鷺田総長は終わりに「多くのインタビューがどうでもいいところから入っている。これからのコミュニケーションはストレートに本題に入らないといけない」と話した。【斉藤徹也】

↑ (2008.5.15 阪大 POST)

(2008.9.22 朝日新聞) →

対話力磨き社会の「核」に 阪大が学生合宿講座

学生の対話力を磨き、学んだ知識をいろんな人に語って生かせる人材に育てようと、大阪大が合宿形式の講座を開いている。卒業後は、市民社会でリーダーシップを発揮する「核」の「新たな社会的ニーズに対応し

ような存在になってほしいという。

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」という講座名で、07年度から開始。文科省の名義のもと、場面設定をした役割

た学生支援プログラム（学生支援GP）にも選ばれた。学部横断で学生から希望者を募り、学年別の日程で兵庫県篠山市の宿泊施設に泊まり込む。医療、減災、演劇、哲学などを学ぶ。

単位にはならないが、08年2月3月にあった1回目（2泊3日）は計80人が参加。今年8月9月の2回目（3泊4日）は計71人の参加希望があった。

8月末の2回生の合宿は19人で行われた。金水敏・コミュニケーションデザイン・センター長（国語学）は日本語の多様さを語った後、謝罪とお願いのメールを書かせ、人間関係に大切なるものを考えさせた。恒藤暁・大学院医学系研究科教授（緩和医療学）はがん告知などの場面を、医療従事者役と患者役で演じさせた。どの講座も模範回答を示さず、学生たちに自由に考えさせる。

経済学部の宮本裕美子さん（20）は「相手の目線、何を求めているかを考えることが大事と

思った」。基礎工学部の石川卓さん（20）は「積極的に人に話しかけるようになってきた」と話した。

担当の大和谷厚・総長補佐は「阪大は旧帝大でありながら『民』の支援で生まれた歴史がある。社会の核となり、専門知識を広く社会に還元できる人材の育成を、阪大のスタイルとしたい」と取り組みの意義を語る。（高橋真紀子）

知識を対話力に変える学び方 事例1

大阪大学
市民社会におけるリーダーシップ養成支援
コミュニケーションの本質を探る
対話型合宿研修プログラム

【吉田幸代】はなを語る。各学生が約30名の学生を公衆の場で発表する。その中で「市民社会におけるリーダーシップ」の育成を目的とした大阪大学では、4月の対話型合宿研修を行っている。

その場について同プログラムの責任者である教育部長の大畑厚教授は次のように説明する。「社会に出てきたときにコミュニケーションが重要である。自分から発信するだけでなく、自分から学びたいという意欲を高めることも重要だ。」

大畑厚 教育部長
「市民社会におけるリーダーシップ」の育成を目的とした大阪大学では、4月の対話型合宿研修を行っている。

その場について同プログラムの責任者である教育部長の大畑厚教授は次のように説明する。「社会に出てきたときにコミュニケーションが重要である。自分から発信するだけでなく、自分から学びたいという意欲を高めることも重要だ。」

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムの目的は、学生が社会で活躍するために必要なスキルを身につけることにある。その中でも、コミュニケーション能力の向上が重要なポイントとなっている。

「対話型合宿研修」では、学生同士が互いの考えを語り合い、課題を共有し、解決策を模索する。この過程を通じて、学生は自分の考えを明確にし、他者の意見を尊重する姿勢を身につけることができる。



大阪大学の教育目標
地域に生き 世界に輝びる
Live Locally, Grow Globally

国際性
教養
デザイン力
国際性

教養
社会的教養・判断力の育成
デザイン力
自由な構想力と実践力の育成
国際性
異文化共生能力の育成

新しい学びのスタイル
新しい学びのスタイル
新しい学びのスタイル



「対話型合宿研修」は、学生が社会で活躍するために必要なスキルを身につけるための重要なプログラムである。このプログラムを通じて、学生は自分の考えを明確にし、他者の意見を尊重する姿勢を身につけることができる。

「対話型合宿研修」は、学生が社会で活躍するために必要なスキルを身につけるための重要なプログラムである。このプログラムを通じて、学生は自分の考えを明確にし、他者の意見を尊重する姿勢を身につけることができる。

↑ (2010.1.20 IKUEI NEWS)

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラム 第2章

「阪大スタイル」実践へ 学生が多彩な活動を報告

大阪学生部キャリア開発課が主催する「学生生活60」市民社会におけるリーダーシップ養成支援」報告会が2月20日(土)豊中キャンパスの21世紀記念ホールで開かれた。報告会には、社会起業家育成委員会の大塚を代表する梅澤奈央さん(文・1年)、平成21年度「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムの参加者が、その後の活動を報告した。

より多くの人に知ってもらいたい。そして、そのために何かイベントを企画するならば、ぜひ私がやりたいと思った」と梅澤さんは、1年生ながら代表としてサミット開催に踏み切った胸のうちを明かした。

8月に行われた同サミットには、教育・食・福祉・環境・国際問題などの各分野で、大阪を中心に活動する社会起業家9団体を招待。学生や地域住民をはじめ、200人以上が参加するなど大盛況に終わった。

これほどまでに「社会起業家」が注目を集めた理由について梅澤さんは、「あたりまえの生き方」に対する価値観が揺らいできているのではないかと指摘。「社会起業家は、『どれだけ利益を上げたか』ではなく、『どれだけ社会問題を解決したか』、そのことによって、『どれだけ社会にインパクトを与えたか』で評価される。お金の尺で測る存在を模索する人が増えたのでは」とサミット成功の裏側について話した。

市民社会においてリーダーシップを発揮することのできる人材「阪大スタイル」。今後、プログラムの参加者を通じて支援の輪が広がり、阪大全体が活性化することも期待される。大学内のネットワーク構築活動「キャンパス in キャンパス」に取り組み洪達超さん(工・4年)は、「自分たち学生が積極的に声を上げ、楽しんで活動していくことが大切。(大学側)やらされているのではなく、一人ひとりがいきいきとやりたいことをやっている姿に後援はうれれもってくれと思う」と自身の思いを述べ、報告会を締めくくった。

【吉田幸代】

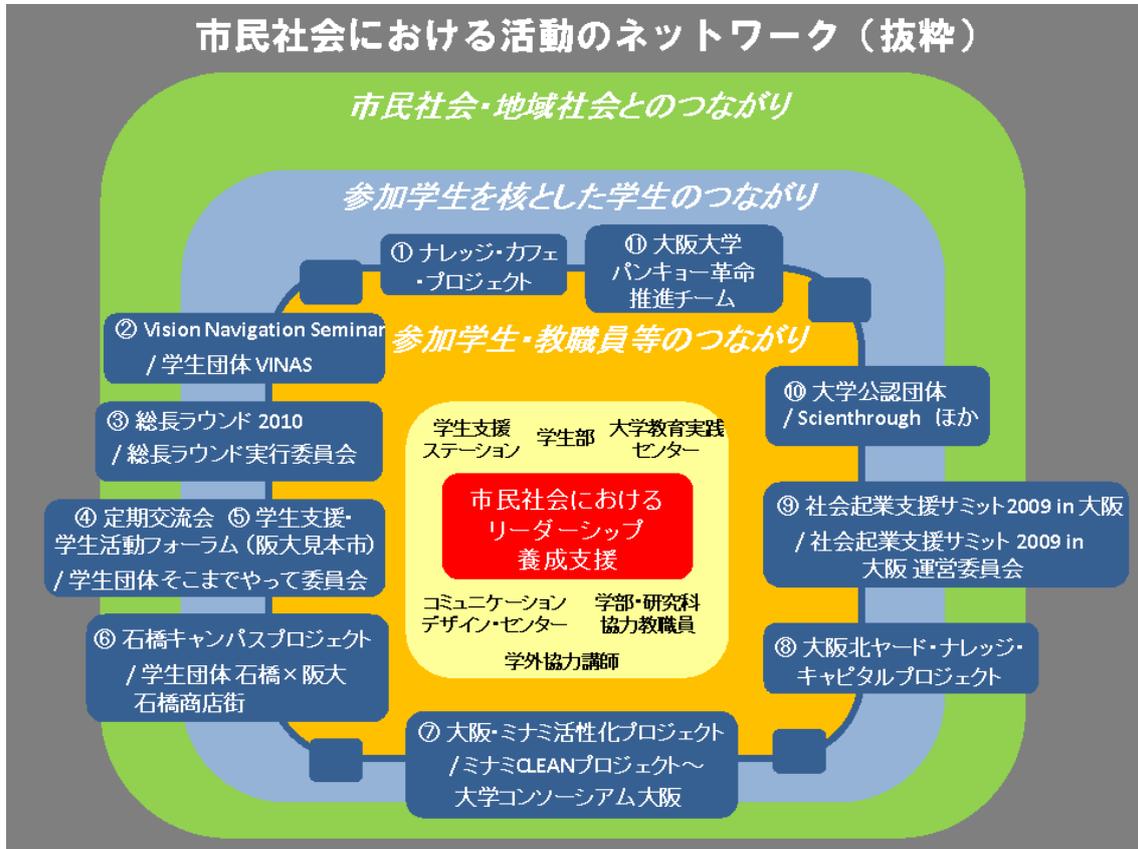


自身の活動について報告する洪達超さん(2月20日・21世紀記念ホールで撮影) 撮影=吉田幸代

↑ (2010.3.31 阪大 POST)

人材育成の成果

市民社会における活動のネットワーク



「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムに参加した学生は、学生支援 GP の全面的支援を受けた団体や学生支援 GP とは独立した団体を新規に結成し、または既存の学生団体等（公認・非公認を問わず）においてプログラムで得られた経験やスキルを發揮し活躍している。現在、複数の団体に関わる学生や支援・協力を行う教職員等によって緩やかなネットワークが促進され、市民社会への関わりが形成されている。この項では、参加学生の人材育成がどのように果たされているか、協力教職員の報告に加えて、学生自らの声を、1.現在または過去に活動した内容の概要、2.GP との関わり：GP の活動によって得られたどのように活かされたか？ 3.今後の展望：「市民社会におけるリーダーシップ」をどのように發揮していきたいか？ の3点に絞って紹介する。

ナレッジ・カフェ・プロジェクト ステューデント・コモンズ物語

国立大学法人大阪大学 大学教育実践センター 教授

木川田 一榮

本プログラムの研修合宿が始まった三年前の二月二十三日、丹波篠山は大雪となった。何もかもが新雪に覆われて、眩い一面の銀世界を創りだした。これから始まる学生たちの初舞台を、まるで雪化粧で祝っているようであった。

そこに集った一年次の学生たちは、研修を通じて得たものを、日常のキャンパス・ライフのなかで、「阪大スタイル」として実践に結び付けていきたいと考えた。どんな活動がふさわしいのか、信頼の絆を築いた仲間たちと深夜まで語り合った。その結果、生まれたのが、「ナレッジ・カフェ・プロジェクト」である。

すでに一部の学生たちからは、「総合大学として学部を超えて、いろいろな学生と出会い、交流できる場が欲しい。」「仲間が集える場所が欲しい。」「ゆっくり過ごせる溜まり場が欲しい。」などの声が上がっていた。一方、大学教育実践センターのセンター長は、「学生のためのスペースを創ろう」という計画案を持っていた。

すでに基本構想は、学生たちのキャンパス・ライフの観察活動(フィールドワーク)などによって、有志の学生たちでできあがっていたが、全学的に組織化された活動にはなっていなかった。研修後、そんな構想を実現化しようと、有志の学生が主体となって、「知的創造環境の創出」をテーマに「ナレッジ・カフェ・プロジェクト」が開始された。第一回会合(3/11)から十数回の全体会合が開催され、学生たちのニーズやアイデアが、要求品質展開表として一つにまとめられた。学生たちの議論から、「知の森」「知的にぎわいが〇〇る。」などの基本コンセプトが生まれ、学生の主体的な学びを支援する知識創造の空間が焦点となった。

そのプロセスのなかでは、学生の構想に共感したキャンパス・デザイン室の教員や院生が参加し、専門知と創造性を活かしたプロトタイプ模型など、より現実性のある企画へと進化していった。さらに、施設部の職員も参加することとなり、有志の学生と教職員からなるネットワークが形成された。このようにして、学生の熱い思いが共感と共に広がり、学生(32人)・教職員からなる実践的コミュニティへと発展していったのである。

やがて、学生をパートナーとしている大学側(教育・情報室)は、副学長をリーダーとして正式に「スペース利用検討ワーキング・グループ」を結成(6/18)した。いろいろな課題も山積していたが、わずか三カ月後、その具体的実現に向けての本格的な活動が始まった。基本設計・詳細設計のプロセスのなかでは、より多くの学生たちの聴取からニーズやアイデアを取り入れ、基本的に学生の要請にもとづく内容となっていた。

学生たちの主体的な活動開始から一年三カ月後、“Student Commons”という名で開設(6/18/2009)となった。オープニング二日目には、プロジェクトをリードした学生たちが、

二つのイベント(“Piano” “Michi”)を主催し、学生たちの学生たちによる学生たちのための「知的にぎわいの場」が実現したのである。これを皮切りに、学生のみならず教職員と共に、さまざまなイベントや交流会がフォーマル・インフォーマルに開催されるようになっていく。「阪大スタイル」のリーダーシップの数々は、ここから生まれつつある。

〈人材育成の効果〉

1. 昨今、産業界から大学への要請として、学生の「主体性・創造力・実行力・ネットワーク力」などの能力の向上が強く求められている。今回の事例は、そのいずれもの能力を十二分に発揮して、これまでにない新しい学習環境の創造の場を創出したことになる。本研修に参加した一年次たちが、それぞれの役割の中でリーダーとなって、高学年次生や建築科の院生を巻き込んでの活動は、きわめて珍しい現象であった。さらには、教員のみならず職員が途中参加することで、全学的な活動となったことも前例のないことであった。学生たちの主体的活動が牽引となって、学生たちの成長だけではなく、ある意味でのFD(Faculty Development)とSD(Staff Development)が生じたという事例となった。
2. この Student Commons は、昨年度の「日経ニューオフィス賞」の近畿地区での特別賞(アメニティ賞)を受賞することとなった。それは予想外の驚きであった。学生の主体的な学びを支援する知識創造空間としての評価ではなかった。「学生と地元商店街との交流を深めるための共同イベント実施や、地域へ学びの場を提供しているなど、ステューデント・コモンズは、大学と地域社会とのコミュニケーションを深める場として用いられている。」として高く評価された。阪大のモットーである「地域に生き世界に伸びる」という考えが、学生たちによって活かされた事例となった。

〈外部からの効果の評価：日経ニューオフィス賞特別賞(アメニティ賞)受賞理由の紹介〉

従来の「教える」から、学生が自発的に「学ぶ」への転換、それを支える「環境」が求められており、当該施設ステューデント・コモンズが作られた。施設の基本構想の段階から学生を含む教職員が一体となって企画しており、「あるべき環境」が理想的なプロセスで作られている。カフェは食事と学習のちょうど中間という位置付けとなっており、「まじめでフランク」なディスカッションがうまれている。セミナールームは、すべて可動式家具となっていて、フレキシブルな運用を可能とし、グループワークにも最適な環境としている。結果、自由で多様性のある環境が学生の自主性を触発し、さまざまな「自発的な学びの場」を生みだしている。



“ステューデント・コモンズ” 開設式典 教職員と企画提案した学生たち
November 9, 2009



鷺田清一総長と企画提案した学生たち November 9, 2009

プロジェクト名／団体名		
Vision Navigation Seminar / 学生団体 VINAS		
1. 現在または過去に活動した内容の概要		
<p>VINAS の活動は主に、新入生に自分の大学のビジョンを考えてもらおうという企画を四月に予定しています。現在は新入生にどのようにして大学生活のスタートダッシュが切れるかという事に焦点を当て、企画を練っている段階です。自分にとって一番楽しい場所、夢中になれる場所を大学に作ってもらいきっかけになればと思います。新入生に主体的に何かに動くことによって大学の四年間を充実させられる！という実感を得てもらえるようにチーム全体で動いているところです。</p>		
2. GP との関わり：GP の活動によって得られた経験がどのように活かされたか？		
<p>まず、一番実感できる事は、この合宿のプログラム自体もそうなのですが、それによってできた仲間と今度は違うフィールドでその経験を生かしているところです。横のつながりによってたくさんの人の活動を知り、その人たちの人脈を元に研究室のやっている事とサークルのやっている事をつなげたり、GP の先輩から他のイベントのスタッフを頼まれたりと、一つの場でできた仲間がたくさんの場を創り出しています。そこでは、当然のように合宿でのグループワークのノウハウが生かされていて参加する側も主催者側としてもたくさんの刺激と学びを得る事が出来ていると思います。</p>		
3. 今後の展望：「市民社会におけるリーダーシップ」をどのように発揮していきたいか？		
<p>リーダーシップというのは一様に定義できるものではないと思います。自分にとってリーダーシップとは、自分と相手を win-win の関係で生かすことができる能力だと思っています。大学に入り、自分で何でもできるという錯覚から、自分のできることは本当に限られているということがわかってきて、いくら誰かの能力を憧れたところで、出来るふりをしたところで何も生まれないということを痛感してきました。これからは、自分のできる精一杯を仲間と掛け合わせて、たくさんの人たちの役に立てるようになりたいと思っています。そのために、今は自分の使い方を学んでいるところだと思います。そこから、より意味のある、自分以外の人にも価値のある活動をしていきたいです。</p>		
	<p>2011 年 チラシ (表)</p> 	<p>2011 年 チラシ (裏)</p>

プロジェクト名／団体名	
総長ラウンド 2010／総長ラウンド実行委員会	
1. 現在または過去に活動した内容の概要	
<p>学生、総長、市民が交流する対話型のイベントとして「総長ラウンド 2010」を企画した。イベントは2部構成になっており、前半は数名の学生が会場に対して「学生の立場・役割」というテーマのプレゼンテーションを行い、それに対して総長からコメントを頂いた。後半はプレゼンテーションを受けての全体討論を行い、大学生活の目標や進路、研究活動、学生の自治等について会場全体で話し合った。大学周辺の商店街等でも広報を行い、当日は市民の方にも参加いただいた。</p>	
2. GP との関わり：GP の活動によって得られた経験がどのように活かされたか？	
<p>GPに関わることで市民社会と大学・学生といった観点で物事を考えるようになったことが私にとってまず大きなメリットだった。実際に市民社会の中で学生が活躍することを目指した取り組みがあると知ったことは、イベントのコンセプトを練り、企画を進める際にも活かされた。また、具体的などころでは、ミーティングの進め方から当日の運営までのノウハウを身につけることができた。</p>	
3. 今後の展望：「市民社会におけるリーダーシップ」をどのように発揮していきたいか？	
<p>現在、私は文学部に所属し、哲学を専攻している。哲学研究と聞くと、市民社会と最も離れたところにあるようなイメージを持つことだろう。文献研究が主である哲学の研究は狭いコミュニティの中で行われるので、市民からのアクセスが難しい。私の現在の課題は、自分の専攻している分野の研究意義について、非専門家が納得できるように語ることだ。哲学研究の専門を活かして市民社会でリーダーシップを発揮するのは難しいが、市民社会との接点を探りながら研究を続けられればと思う。</p>	
	
会場の様子	鷺田清一総長と対話する参加者

プロジェクト名／団体名
定期交流会／学生団体 そこまでやって委員会（中間支援組織）
1. 現在または過去に活動した内容の概要
<p>大阪大学、そして大阪大学をとりかこむ地域で活動する、学生・教員・職員・地域の人々をゆるやかなネットワークでつなごうという主旨で活動しています。情報と知識を共有する目的で大きく 2 つの事をしていて、定期交流会の主催とメーリングリストの管理をしています。交流会は、活動の発表の場・意見交換の場であり、様々な立場の人達が気軽に交流できる形態をとっています。そして交流会で出会った人たちとその後スムーズに連絡がとれるようにメーリングリストがあり、また困ったとき、他の活動団体の意見を聞きたいとき、イベントを告知したいときなどに活用してもらいます。</p>
2. GP との関わり：GP の活動によって得られた経験がどのように活かされたか？
<p>当時のそこまでやって委員会の代表者に、GP 主催のリーダーシップ研修を勧められました。この合宿に参加して、普段かかわる機会のない他学部の学生や教職員と交流して、ありとあらゆる話題について意見交換することで参加前より自分の視野を少し広げられた気がします。そして、参加している人達は思い思いの活動をしていて、そういった人達とつながりが出来た事自体が、現在行っている活動の定期交流会などに直接活かせるいい機会となりました。また何より刺激を受け、自分のこれからの活動のモチベーションがあがりました。</p>
3. 今後の展望：「市民社会におけるリーダーシップ」をどのように発揮していきたいか？
<p>今している定期交流会とメーリングリストのしっかりとした運営を地道に継続して行くことが重要だと思います。普段は吹田キャンパスで周りが工学部の学生しかおらず、気持ちが研究だけに向き合いがちになりですが、自分が大阪大学の学生として何かできることをしようという気持ちは持ち続けたいです。今の活動を継続させた上で、大阪大学のゆるやかなネットワークを構築するために、フォーラムなど大きな企画を実行し、活動団体を勇気づけ、継続と発展が応援できるように体制を整えていきたいと考えています。そして大阪大学にはどんな団体がありどんな活動をしているかという情報を周りに与えることで、刺激を受け、自分も自ら何か行動してみようと思ってもらえたら幸いです。自分の行動で周りにより影響が出るのがリーダーシップを発揮することにつながるのではないかなと思います。</p>

プロジェクト名／団体名
学生支援・学生活動フォーラム「阪大見本市」／学生団体 そこまでやって委員会（中間支援組織）
1. 現在または過去に活動した内容の概要
5月に行われる大阪大学の「いちょう祭」において行う大阪大学80周年記念行事、「阪大見本市」に向けての用意を行っています。「阪大見本市」とは、イメージとしては、大学と地域を結ぶフォーラムのようなものです。ただ、今までと違う大きな点は、企画・立案段階から、学生を中心にしながらも、教員、職員、地域の方、といった立場の違う人間が母体となって行事へ向けて活動を行っている点です。具体的には、フォーラムへ向けて、阪大内外の団体への呼び掛け、会議の実施、などを行っています。
2. GPとの関わり：GPの活動によって得られた経験がどのように活かされたか？
GPの活動によって何が得られたか、ということが今だによくわかっていません。ですので、どう活かされたか、という問いに対しては余計に分かりません。しかし、「これをすれば、こういったスキルが身に付き、こうした結果がでるよ」といった、「わかりやすい」ものが溢れている中で、このGPでの経験は、今自分が活動を行うよりどころになっている「なんだかよくわからないもの」があるとすれば、そこで大きな要素をなしている。そのことだけは強い実感を持って言える、そう思っています。
3. 今後の展望：「市民社会におけるリーダーシップ」をどのように発揮していきたいか？
GPで学んだのは、「リーダーシップはこうすれば発揮できる」というものはないということです。ですので、現時点では「こうやって発揮してやろう」などとは考えていません。リーダーシップは自分一人で成せるものではありません。他者との関わりあいの中でしか、そして事後的な形でしか、現れてこないと思います。ですから、自分としては、「知行合一」の精神で、目の前にある課題に一つずつ取り組んでいこうと思います。

プロジェクト名／団体名
石橋キャンパスプロジェクト／学生団体石橋×阪大、石橋商店街
1. 現在または過去に活動した内容の概要
<p>以下の 2 点をコンセプトに、石橋地域と大阪大学の交流を促進すべく、イベント開催を中心に活動しています。</p> <p>1、石橋と阪大がつながる場を提供する。</p> <p>2、新たな取り組みを行なう機会を提供する。</p> <p>具体的には、地域のお祭りを手伝う、音楽サークルを地域に誘致し恒例イベントとして定着させるなどを行なってきました。</p>
2. GP との関わり：GP の活動によって得られた経験がどのように活かされたか？
<p>逆説的ですが、大学でコトを起こすことの限界を知ることができ、学外に出て活動することの意味を見出すことができました。</p> <p>GP によってオーソライズされることで、自分が大学内で可能な範囲を最大限に活用し、やりたいことを実現できました。</p> <p>それによって得るものも多い反面、そこに限界を見出し、より大きな可能性と限界を求めて大学外で活動するようになったのです。</p> <p>その意味で GP は有意義だったと考えています。</p>
3. 今後の展望：「市民社会におけるリーダーシップ」をどのように発揮していきたいか？
<p>私は大学生という立場が、何かの義務感に駆られる必要はないと考えています。つまり、各人がやりたいことをやればよい。</p> <p>しかし、それに際して必要になってくるのは、自分がやりたいというプライベートなモチベーションを、パブリックに開いていかなければならないということ。開く際に、自分を律する力、周りを巻き込む力などのリーダーシップが必要になってくるのだと考えています。石橋×阪大が開いていくことの面白さを伝え、開く機会を提供することを目指しています。</p>

プロジェクト名/団体名

大阪・ミナミ活性化プロジェクト～ミナミ CLEAN プロジェクト～

1. 現在または過去に活動した内容の概要

大阪ミナミと聞くと、少し怖いイメージを思い浮かべる学生も少なくありません。特に、私たちが活動した平成 21 年は、薬物問題が広く報道され、ミナミでは薬物が売買されているらしいというイメージから、ミナミへ行くのを躊躇う学生もいました。

そこで、私たちは、6 大学から 8 人のメンバーが集まってチームを結成し、大阪ミナミのイメージアップと、学生への薬物啓発を目標に、大阪府内の 5 大学を回ってプレゼンテーションを行いました。

2. GP との関わり：GP の活動によって得られた経験がどのように活かされたか？

GP では、大学の授業ではあまりないグループワークやディスカッションを数多く取り入れているため、議論を活性化させる手法や議論を導く能力を、私は人より持っていました。そのために、プロジェクトのメンバーから信頼され、リーダーに選ばれました。

3 ヶ月間ディスカッションを重ね、1 か月間各大学を回るという中期プロジェクトで、何度も議論がつまることもありましたが、GP で友人たちが行っていた手法を思い出し、参考にしながら、困難も乗り越えることができました。

3. 今後の展望：「市民社会におけるリーダーシップ」をどのように発揮していきたいか？

社会人になると、居住地域としての市民、社会構成要素である企業の一社員としての市民、様々な形の市民として社会に関わることとなります。受け身的な市民が多い中、私が率先してリーダーシップを発揮し、市民一人ひとりの声を素直に受け止めながら、全体の合意形成を行い続ける姿勢を忘れることなく、皆が輝くことのできる明るい市民社会を作るよう努力したいと考えています。

薬物根絶へ 学生集う

大阪府内の 5 大学を回り、薬物問題の現状や啓発の重要性について話し合った。大阪府内の 5 大学を回り、薬物問題の現状や啓発の重要性について話し合った。大阪府内の 5 大学を回り、薬物問題の現状や啓発の重要性について話し合った。

【同年代に怖さ伝えたい】プロジェクトの学生は、この問題を身近に感じ、自分たちから発信したいという思いで、大阪府内の 5 大学を回り、薬物問題の現状や啓発の重要性について話し合った。

（2009.12.1 読売）



大阪大学 経済学部の学生で、薬物問題の啓発活動に取り組んでいる。この日は、大阪府内の 5 大学を回り、薬物問題の現状や啓発の重要性について話し合った。

4年後差がつく 大学1年教育

大学1年生を対象にした教育である初年次教育が注目されている。かつては補填のイメージが強かったが、語学や文章作成、自己管理能力など、大学で学ぶために必要なスキルを身につける場にあわてきている。

ライター 石渡雅典、山内大地

(2009.12.1 読売)

(2010.8.16 AERA)

プロジェクト名/団体名
北ヤード・ナレッジ・キャピタル・プロジェクト～大阪に元気創造拠点をつくろう！～
1. 現在または過去に活動した内容の概要
<p>梅田北ヤード・プロジェクトという関西圏最大の都市開発計画活動に、大阪をホームグラウンドとし、その将来を担う学生の感性とアイデアを生かして、魅力あるまちを創りたい！と思い、新型インターンシップに応募しました。テーマは、「若い感性が未来を築く。未来をつなぐ若者のコミュニティを創る」です。他大学からの学生と共に協働型プロジェクトを進め、事業会社(KMO)への提案を行いました。私たちの提案内容は、今後、重要な知識として事業実施計画の中に反映されていく予定とのことです。</p>
2. GP との関わり：GP の活動によって得られた経験がどのように活かされたか？
<p>本プロジェクトのプロセスから最終プレゼンテーションまで、GP に参加した学生がリーダーとなって、GP で体得した手法や知識を駆使して、質の高い最終提案を創りあげることができました。一例を挙げると、GP で体得した手法である、ブレインストーミングによって課題を洗い出し、様々な角度から検討してみるとともに、全員のバックグラウンドや知識を生かしたアイデアを出し合い、その構造化を行いました。また、個々人の価値観や考え方がぶつかり合い、行き詰った時にも、粘り強く他者と対話し、よりよいものを創り出すことにこだわる姿勢で臨むことができました。このように、かたちのあるなしに関わらず、様々な点で、GP で得られた手法や考え方を生かすことができたと思います。</p> <p>さらに、インターンシップという実践の場を通して、リーダーシップにも様々なかたちが存在してもいいのだということを実感しました。GP に参加した学生らがチームリーダーを務め、積極的に発言し、どんな意見にも耳を傾ける姿を見せる中で、最初のちぐはぐだった雰囲気は劇的に変化しました。チームの全員が、自身の役割を考え、自分の長所を生かしたリーダーシップを発揮し、他者に貢献することの重要性を自覚するようになりました。</p>
3. 今後の展望：「市民社会におけるリーダーシップ」をどのように発揮していきたいか？
<p>魅力あるまちづくりプロジェクトへの参加型フィールドワークという高質な体験をしたことによって、近い将来の自己の生活基盤となる創造都市コミュニティとのよりよい関係性を考え、豊かな未来生活を描けるデザイン力と実践のコミュニティ力を身につけることができたと思います。今回の実践的経験を通じて、将来の大阪の市民社会におけるリーダーシップの基本的能力を育むことになったのではないかと思います。</p> <p>これを契機に、北ヤード・プロジェクトに継続的に関わっていきたいと思います。それによって、プロジェクト実行のプロフェッショナルや社会人との協創(Collaboration)を通じて、私たち若者の想像力と知力によって、知的にぎわいのある都市機能・時空間・仕組みづくりの具現化に貢献していきたいと思います。</p>

プロジェクト名／団体名
社会起業支援サミット 2009 in 大阪／社会起業支援サミット 2009 in 大阪 運営委員会
1. 現在または過去に活動した内容の概要
<p>社会起業家とよばれる方々をより多くの人に知ってもらうためのイベントを開催。大阪を中心に活動する NPO 団体など 10 団体に集まっていただき、参加者 200 名弱の前でそれぞれの活動のプレゼンやトークセッション、交流会を行ってもらった。目的は、金銭目的ではなく純粋に社会問題を解決したいと本気で活動している方々のことを参加者に知ってもらうこと。企画のきっかけは、私自身が社会起業家に興味をもち、多くの人に社会起業家の存在を知ってもらいたいと思ったから。</p>
2. GP との関わり：GP の活動によって得られた経験がどのように活かされたか？
<p>プロジェクト運営にあたり、誰かと協働して物事を進めていくことの難しさを痛感した。けれども、対立があったとしてもとにかくコミュニケーションをとることによってメンバー同士が歩み寄れることを GP 合宿のグループワークで体感していたから、乗り切ることができた。GP では自己主張の強い友人が多数得られ、お互いに妥協せずに物事を成し遂げることの面白さを知った。このことで、メンバー同士の関係も良好に保ちながらも、最高のものを創り出すよう努力するようになった。</p>
3. 今後の展望：「市民社会におけるリーダーシップ」をどのように発揮していきたいか？
<p>自分ひとりで出来ることなど限られている。しかし、周りの人を巻き込むことができれば、想像もしていなかったものが生み出せる。多くの人力をまとめて、良い成果をあげるためにリーダーシップが必要なのだと GP で認識した。今後は、やりたいことを抱えているもののくすぶっている人たちに働きかけて、大勢で協力すれば思いもよらない結果が生まれることを伝えていきたい。人と人をつなげて、それによってうまれる大きなエネルギーを生かして、今後の活動をしていきたい。</p>
 

プロジェクト名／団体名
学生団体 Scienthrough
1. 現在または過去に活動した内容の概要
<p>Scienthrough はサイエンスコミュニケーションを推進する学生団体です。主な活動は3つあり、本を媒介にした新たなコミュニケーションの場を提供する新しい形の書評会「ビブリオバトル」の運営、さまざまな研究科に所属する大学院生が集いざっくばらんな研究交流を行う「合ケン。」の開催、大学内のさまざまなひととひとをつなげるフリーペーパー「SKHOLE」の発行を行っています。</p> <p>個人の疑問を発案とし、多種多様な学部・研究科に所属するメンバー内で共有・議論し、企画を行うこと等を通してさまざまな視点から疑問を考え、深めています。</p>
2. GPとの関わり：GPの活動によって得られた経験がどのように活かされたか？
<p>GPでは、異なる背景をもつ他者との協業の中で、自分の意見を他者に分かりやすく説明する能力と、相手が本当に伝えたいことを理解する能力を身につけました。</p> <p>所属する学生団体では、イベントの企画等を行う中で、専門分野以外のメンバーと一緒に企画をつくりあげたり、教員・職員・社会人のアドバイザーからアドバイスをもらったりすることが多々あります。そういった多様な背景をもつ他者との関わり合いの中で、GPで得られた経験は強い力となりました。</p>
3. 今後の展望：「市民社会におけるリーダーシップ」をどのように発揮していきたいか？
<p>市民社会におけるリーダーシップとは、異なる背景をもつ他者との関わり合いの中で、Common sense を持ち、適切な仕組みづくりを行っていけるような力であると考えます。</p> <p>今後は、より多くの大学構成員を巻き込み、大きなうねりとなって大学が抱えるさまざまなコミュニケーションに関する問題を解決していくとともに、それぞれの活動が自立的に成長していけるような仕組みづくりを考えたいと思います。</p>

プロジェクト名／団体名
大阪大学パンキョー革命推進チーム
1. 現在または過去に活動した内容の概要
大阪大学パンキョー革命推進チームは、学生と教職員が力を合わせ、大学教育の改善に取り組む活動をしています。これまで、学生・教職員が1つのテーブルを囲み共通教育の問題について議論する「パンキョー革命」や、新入生に大学生生活の過ごし方を提案する「キャンパスライフ・デザイン」、社会人ゲストをお呼びし、学生とともに働くことについて考える「キャリア・ケーススタディ」などを実施してきました。
2. GPとの関わり：GPの活動によって得られた経験がどのように活かされたか？
GPの活動として、一昨年のいちょう祭期間中に「恋のから騒ぎ with 留学生」というイベントを企画・運営しました。この活動を通して、仲間と力を合わせてゼロから自分たちのイベントを作り上げる楽しさを経験しました。現在、研究とアルバイトと就職活動とのバランスを取りながらパンキョー革命の活動を進めていくことには少し苦勞していますが、仲間と力を合わせてゼロから自分たちのオリジナルのイベントを作り上げる「楽しさ」が力の源になっています。
3. 今後の展望：「市民社会におけるリーダーシップ」をどのように発揮していきたいか？
私にとってのリーダーシップとは具体的に何なのか。その結論はまだ出ていません。しかし、変化が激しい今の世界に身を置いたときに組織をリードしていけるだけの人間になりたいとは考えています。そのために、先見力を養うことに注力しようと思います。また、GPの活動を通して、多くの同世代の仲間に恵まれることができました。彼らと仲良くなれたことを本当に嬉しく思っています。大学を卒業した後も、ずっと大切にしていきたいと考えています。

外部からの評価

大阪大学生の市民社会におけるリーダーシップについて

「ナレッジキャピタルにおけるインターンシップ活動を通じて思うこと」

株式会社ナレッジ・キャピタル・マネジメント プロジェクト・マネージャー

棚倉 進

弊社では、一昨年、昨年と大学コンソーシアム大阪主催のプロジェクト型インターンシップに参加し、「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムを受講していた大阪大学の学生さんに、各年 2 名ずつご参加いただきました。その活動を通じて、感じたことを率直にお伝えしたいと思います。

まず、プロジェクト型インターンシップというのは、課題を設定しワークショップ型で展開するものですが、参加しているメンバーは、大阪府内の複数の大学から 1 年生から大学院生まで、男女、理科系・文科系を問わず、まさに、価値観の異なる人達が集合し、ひとチーム当たり 5~6 名に分かれて課題に対して調査活動、ブレインストーミング、プロトタイピング等の過程を通じて、課題に対する回答を導きだそうとするものです。

インターンシップの初日に、参加者十数名の方々が、一人の持ち時間 1 分間で自己紹介を行いました。年齢も学部も異なる初対面の人達が多い中、皆さん緊張されている面持ちでした。なかなか、時間通りに自己紹介ができず、時間が余ってしまったり、自分自身を限られた時間の中でうまく表現できなかつたり、さまざまな学生さん達がいました。その中で、目を引いたのは、リーダーシップ養成支援を受講していた阪大生さんでした。時間どおり、自分自身を他の人達にわかりやすく、うまく表現して自己紹介を行っていました。

また、各チームに分かれて、役割分担を行ない、活動する際も指示待ちではなく、阪大生は、自ら積極的に他者に声掛けを実施し、対話による気づきやアイデアを引き出そうとしている風を感じられました。自分の意見を押しつけるのではなく、他者との対話から新たなアイデアや気づきを見出そうとし、かつ、各人が意見を言える雰囲気づくりをしている姿勢を感じられました。また、そのような姿勢が他者の参加者意識を引き上げ、モチベーションを向上させていたように思われます。

一人のリーダーが、回りに良い影響を与え、次なるリーダーを生み出していく好循環を感じられました。市民社会において、リーダー教育を行っていくことは、情報通信社会の中でフェイス TO フェイスの交流が少なくなる中、心の通ったコミュニケーション機会を増やす意味でも、サークルやコミュニティ活動の活性化と質の向上が大切であり、その組織のリーダーとなる人材育成がまさに必要であることが実感されました。

弊社では、大阪駅北地区開発区域における中核施設である「ナレッジキャピタル（知の創造拠点）」の中に、さまざまな分野の人達（ビジネスパーソン、研究者、技術者、クリエイター、学生等）が交流する場と自己成長を促す場の提供を行っていきたいと考えていますが、ぜひとも、このような「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムを、意欲的な方々にご提供をし、将来のコミュニティのハブになっていけるような人材育成に取り組んでいきたいと思っております。今後、ますます市民社会におけるリーダーシップ教育が盛んになり、人的ネットワークのハブとなる人材が増えることにより、新たな出会いと交流が生まれ、そこから、新たなアイデアや気づきが生まれることを期待したい。

以上

会社概要

大阪駅北地区先行開発区域プロジェクトを進める開発事業者12社により、「株式会社ナレッジ・キャピタル・マネジメント」(KMO)を設立。
KMOはナレッジキャピタルにおいて、産官学のコラボレーションによるイノベーションの場の設定と運営を行います。
まちびらきに向け、街の中核機能であるナレッジキャピタル施設の機能や役割、運営方法等について検討していきます。
まちびらき後は、主体的にナレッジキャピタルでの活動を統括し、コラボレーションプロジェクトの創出をサポートします。

- 商号: 株式会社ナレッジ・キャピタル・マネジメント
- 所在地: 大阪市北区芝田1丁目1番4号 阪急ターミナルビル
- 役員構成:

代表取締役社長	間淵 豊	(オリックス不動産株式会社 専務執行役員西日本営業本部長)
取締役	西名 弘明	(オリックス不動産株式会社 代表取締役会長)
取締役	林 総一郎	(三菱地所株式会社 常務執行役員大阪支店長)
監査役	関 重樹	(オリックス・エム・アイ・シー株式会社 常務執行役員)
- エグゼクティブアドバイザー: 宮原 秀夫 (独立行政法人情報通信研究機構 理事長)
- 設立: 2009年4月1日
- 資本金: 2.5億円
- 株主: 大阪駅北地区先行開発区域開発事業者12社
 NTT都市開発株式会社
 株式会社大林組
 オリックス不動産株式会社
 関電不動産株式会社
 株式会社新日鉄都市開発
 住友信託銀行株式会社
 積水ハウス株式会社
 株式会社竹中工務店
 東京建物株式会社
 日本土地建物株式会社
 阪急電鉄株式会社
 三菱地所株式会社

参加者からの評価

市民社会におけるリーダーシップ養成支援に参加して

国立大学法人大阪大学 理事・副学長

門田 守人

本プログラムの趣旨も目的も十分理解することなく、4年間連続して3年次のコースに参加させてもらった。忙しい合間での参加であったが、忙しさを忘れさせてくれる素晴らしい企画で、終わって帰るときには毎回、清々しい満足での帰路であったことを覚えている。また、このプログラムの時ほど阪大生が頼もしく思えたことは他にないと言っても過言ではあるまい。そういった意味において、このプログラムでは、学生に何かを提供し、指導したというよりも、学生と一緒に考えさせてもらったと言う自分にとっても学びの場を与えられた気持ちが強い。

目的も理解せずの参加であったことは述べた通りであるが、初めて参加した時は、筆者にはどんな話題の提供ができるであろうかの問いから始まった。自分が医師としての40年近く患者さんに接してきて、いつも感じていることは、多くの日本人は常に健康で元気であることが大前提になっており、病気に罹るまで自分自身の病気あるいは“いのち”について真剣に考えたことがないのではないかということである。その結果、例えば癌と診断された場合、医療現場では大きな困惑と混乱が発生しているのである。そのような理由から、現代日本人に自分が今生きていること、同時に、自分の身にいつ死が訪れるかわからないことを健康な時に考える機会を与える必要があると考えていた。そこで、このプログラムでは学生たちにこの点を考えてもらおうと思った。そして、テーマを「死について考える」とすることを考えたが、死と生は表裏一体なもので「生について考える」とした。

次に考えたのは、健康な学生たちに真剣に死を考えてもらうにはどうすれば良いかということである。ゲームの中の死、ドラマの死などの架空な死については十分知っているはずである。しかし、これは今回のテーマには何ら役立たない。今回の企画では自分の死をイメージし、自分の死を真剣に考えてもらうことである。現実味を以て、自分の死をイメージすることは簡単にはできることではない。所詮、人間には死は体験できないのである。そこで思いついたのが、臓器提供のドナー・カード(意思表示カード)である。これは、自分が脳死あるいは心臓死になった時、自分の臓器を他人に提供することを生前に意思表示しておくものである。当然ながら、提供しない選択も許されるのである。学生に自分が脳死に陥ったことをイメージし、そうなった時には自分の臓器を他人に提供することを想像してもらい、ドナー・カードに意思表示するかどうかを考えてもらった。脳死にしても臓器提供にしても、これらは総て仮想の世界である。しかし、自分の意思を決め、本物のドナー・カードに、提供する臓器に印をつけ、または提供しないことを明記し、その日の日付を記入し、最後に自分の署名をする実際の行為を伴う体験をしてもらった。この方法で、自分の死を身近にイメージしてもらうことを考えた。この考えは的中し、目的を果たすこ

とができた。グループにより、学生により考え方はそれぞれ異なったが、素晴らしい真剣なディスカッションを聞くことができたことは、楽しい記憶として残っている。



学生支援GP「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」報告

国立大学法人大阪大学 コミュニケーションデザイン・センター 准教授

本間 直樹

私は、本プログラムのなかで、「哲学カフェ」の紹介と実演を中心に、対話することの面白さを参加者に伝えようとしてきた。しかし最終年までの3回では、私の方から話す場面がどうしても多くなったうえ、プレゼンテーションの事前準備を念入りにすればするほど、私の話は長くなってしまった。

そこで最終年度では、「臨床哲学：ともに考える喜び」というテーマで、哲学カフェの様子が分かる写真や、それ以外の映像資料いくつかを除いてはあえて何も用意せず、素手で4時間、対話に挑むことにした。当日、参加者一人一人と順番に言葉を交わし、全員と文字通り問答を行った。最初数人に、昨日はどんなことを経験したのかと尋ね、合宿の様子を教えてもらった後に、導入として私自身のこれまでの活動を15分ほど少し話し、以後は一人一人の前に立ってどんなことが聴きたいか、どんな関心をもったのかについて順に質問して回った。質問内容に応じて、写真やビデオを見せたりもした。当然、こうしたやり方をみて参加者もやや面食らった様子だった。後で感想を読むと、なかには何がやりたいのか分からない、という声もあった。それはそうだろう。筋書きは用意されていない。私は「何か話したい、ききたいことはありますか？」と一人一人に尋ねたのだから、私のなかに何かやりたいことが明確にあったわけではない。対話が盛り上がるかは、参加者次第だ。対話するとは、私の側にある何か伝えたいことを一方的に伝えるのではなく、相手から聴き取ることからはじまる、それがすべてのコミュニケーションの始まりである、このことを端的に体験してもらうことだけが目的であった。

私としては、今まで試みたことのない刺激的な試みであった。もちろん、結果はうまくいった部分とそうでない部分と半々だったと考えている。全員と対面で言葉を交わすことができたのは非常に満足している。私がどんな質問を受けても咄嗟に返して話をつなげていったことに関心する学生もいた。うまくいかなかった部分は明白である。やはり、私の応答が長過ぎたという点である。「講義みたいだった」という感想には最初ややショックを受けたが、おそらくは、ずっと座ったまま話だけをする、ということがそう見えたのだろうし、何と言っても私の話す時間が多すぎたのだ。私の話が長ければ長いほど、参加者の質問する気が失せていくのを肌で感じることもできた。まだまだ話し足りないと感じる部分はあるのだが、それを私の方から繰り出すのではなく、聴き手の関心に沿うかたちで、話したい部分をいかにもともに作っていけるのか、この点に関してはまだまだ修行が足りないと痛烈に感じた。

最後に、このような実験的な機会を四度もいただき、プログラム企画・実施者のみなさんに大変感謝いたします。

学生支援 GP の取り組みに参加して

国立大学法人大阪大学 言語文化研究科 准教授

井元 秀剛

筆者は「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムに平成 19 年度から 4 年連続で参加させていただき、1 年生を対象に「ことばの仕組み」という講座を担当させていただいた。初年度は学生とともに二泊、次年度は一泊、三年目と四年目は講座にのみ参加し、学生たちと食事をともにさせていただいて帰宅した。いずれの年も学生たちが積極的に課題に取り組む姿勢に、こちらも大いに刺激を受けて帰ったものである。

筆者が学生の頃に比べて、学生相互の交流の密度は年々希薄になっているような気がする。ネットを介したバーチャルな交流はそれなりに進んでいるのかもしれないが、顔をつきあわせ、文字通り寝食を共にする、というような機会は一部の課外活動に参加する学生（それも減ってきているらしいが）以外はあまりないのではないか。合宿というスタイルは一定期間、隔離された場所で目的を持って集団で何かを学ぶということであり、悪用されればマインドコントロールにもつながりかねない危険な形態であるが、うまく活用すれば、貴重な「学びの場」を学生に提供することができる。

筆者のねらいは、学生に自ら考える力を養ってもらい、仲間と議論することでその内容を吟味・展開し、自分のものとしてもらうことである。文系・理系にかかわらず、誰もが予備知識なしに考えられるテーマとして、筆者が 4 年間のうち 3 年間連続して使わせてもらった課題は「鏡に自分の姿を映すと、右と左が逆になります。しかし、上と下は逆になりません。面に対して対称という関係にあるはずだから、上下と左右は同じ関係にあるはずなのに、なぜ違いが生じるのでしょうか。」というものである。グループごとに分かれて議論させ、まとまった内容を 5 分間で全員に紹介してもらい、そしてその内容を質疑応答を通じて他の班のメンバーとも考えてもらう、という形式である。これが実に盛り上がり、逆立ちをしてみようとしたり、メンバーを向かい合わせて、それぞれ右手や左手をあげさせたり、何とも楽しい。筆者はそれを聞きながら、学生の質問を誘導したり、矛盾をついたりして議論を進めていくのである。

通常の授業の形態の中でも、この種の試みは可能であるが、合宿の時ほどは盛り上がりがないし、学生の参加態度も全く違う。専門の違う仲間とあれやこれやと意見を出し合い、語り合うことの楽しさは格別であろうし、その間に大きな発見があり、得るものもまた大きいと信じている。もちろん、この形態には限界がある。本来の学問や研究は一回性のものではなく、下調べをし、先行研究に丹念にあたって、一步一步積み重ねていくという根気のいる作業を抜きにしてはほとんど何も得られない。しかし、時に非日常的な空間の中で、仲間と語り合いながら、普段あまりふれない領域に広く接して考え方を養うというの

は貴重な体験であり、市民社会のリーダーとなるべき基礎力を養うきっかけになるはずである。そのことを学生たちの反応からも感じることができた。



「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」に参加して

大澤法律事務所 弁護士

大澤 恒夫

1. はじめに

私はこのプロジェクトに 2008 年度から 3 年間、講師として参加させていただいた。担当は二年次のプログラムであり、共通テーマ「市民との対話と協創(コラボレーション技術とソーシャル・ネットワーク形成の習得)」について、「人とつながり、人をつなぐー相談・交渉を考える」という切り口で、毎年 4 時間程度の集中ワークショップ (WS)を行った。

2. WS の目標

私は日常、弁護士として仕事をしている。弁護士の仕事は、人々が社会生活上直面する様々な問題について、その解決や予防を図るものであるが、仕事の中心をなすのは人々との「対話」である。異なる価値観や立場などを有する人々が、対立し影響しあいながらも問題を克服し、互いに独立した人格として共生するためには、対話がいわばインフラともいべき重要性を有する。リーダーシップというものが社会生活上の問題解決を行っていく力の一側面だとすれば、対話の理念や技術を習得することは、学生にとっても重要な課題となろう。この WS では、「対話」の中でも市民が日常行っている「相談」や「交渉」を取り上げ、学生自身の経験をよりよいものに磨き、重要な実践的な知恵に気づいて、若干の理論的な視点も持ちうるようにすることを目指す。

3. WS の基本的アプローチ

WS ではまず、すべての学習は自分自身の経験をベースに（しかしそれに固執せず）、常に自分自身を振り返り内省 (reflection)して磨きを掛けることであり、その中から善いものを自分自身の知恵として内面化し、理論的な裏付けも加えながら、豊かなものにしていく必要があることについて、理解を促す。これは現代の新しい専門家の在り方として注目されるドナルド・ショーンの「内省的実践」に通じるものであり、WS でもゲームやロールプレイをした上で様々な角度から内省を加え、ディスカッションの中で互いに気づき合うことを大切にす。

4. 学生によるファシリテーションなど

WS が進行するに連れて、プレゼンテーションはもとより、議論のファシリテーションやホワイトボードへの整理なども学生諸君に担当してもらうようにする。これらを通じて、学生が自分たちで会議での議論を盛り立て、多様な観点から深めてゆく練習を行うことを期待する。

5. WS の内容

WS では、様々な人間の相互性や傾聴の意味などを体感するゲームやロールプレイを行うほか、日常的な交渉の寸劇、更には困難な交渉に取り組むプロフェッショナルの姿の映像

などの上映も取り入れている。また、セッションごとに各自が振り返りシートに記入をし、それを基にして、ファシリテータのもとで振り返り（内省）のディスカッションを行って、各自がセッションの中で直面した問題や気づき等を全体で議論し、ホワイトボードに記載して整理する。また各セッションでの経験や気づきに関連する理論的なレクチャーも行う。例えば、前記の内省的実践論、ナラティブ・アプローチ（物語論）、積極的傾聴の技術、交渉理論などである。

6. 反省点

WSの反省点としては、4時間の時間では十分に消化しきれない内容を盛りこんでしまった面があったこと、及び、個々人の経験及び振り返りと全体でのディスカッションを中心としているため、グループワークが少なかったことが挙げられる。

7. おわりに

このプロジェクトを通じて、私自身多数の学生諸君と貴重な時間を共にし、様々なことを学ばせていただいたことに深く感謝したい。それと共に学生諸君が将来社会の隅々でリーダーシップを発揮し、よりよい市民社会の形成に向かって活躍されることを心から願っている。



「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」に関わって

独立行政法人情報通信研究機構 上席研究員
国立大学法人大阪大学 サイバーメディアセンター 教授
下條 真司

長く続く閉塞感の中で、我が国は **Innovation** を創り出す **game changer** を求めている。筆者の関係する情報の世界で言えば、**Google** に代表されるクラウドサービスがその典型だ。検索やメールと言ったサービスはネットワークを通じてアクセスできればよく、それが実際にどの国のサーバーで行われているかは重要ではない。**Google** がサービスを提供すれば、それはインターネットを通じて世界に行き渡るサービスになってしまう。このようなグローバル化が世界中で進む中で、国際社会において **game** を変え、新しい地平を切り開いていける人材を求めている。

しかし、教育人の端くれとしてそういった人材をどのように育てればいいのかに常に頭を悩ませている。また、技術革新のスピードの速い世の中において、価値基準が急速に大きく変わってきており、その中で何を高等学府における大学において教えればいいのかは難しい。これまで、大学は一流の知識人を集め、そこに参加するものだけに教える、いわば知識を囲い込むことでその価値を生み出してきた。しかし、今や音楽も映画も **CD** や **DVD** を「所有する」ものから「アクセスする」ものになりつつある時代の中で知識もインターネットで簡単に手に入る。

そんな中で、本プログラムに関わらせていただいた 3 年は大きな収穫であった。次世代のリーダーを育てる研修、合宿形式、学部を超えて選抜された学生たち、グループディスカッションを取り入れた講義あるいは研修というのは、筆者にとって、新鮮で貴重な体験であった。

1 年目の 2008 年は、「**IP Integration と Open Innovation**」と題して、携帯電話を例にとりながら通信と放送が今後の世の中をどう変えていくかをみんなで考えた。専門の異なる学生が集まっていることで、できるだけ技術的な話は避け、みんなの興味を持てる携帯サービスやデジタル放送の話を中心にしたつもりだ。グループディスカッションはこれまでやったことがなかったので、少々面食らった。ただ、木川田先生や大和谷先生らをはじめとする運営スタッフのおかげで学生はアイスブレイキングもうまくいって、仲良くなっており、議論の行い方、まとめ方もなれており、こちらから材料を提示するだけで、十分議論が行える環境は整っていた。ただ、こちらの方が気負いすぎていつもの調子でスライドをたくさん用意したおかげで、時間が足りなくなってしまった。学生には、最後にユビキタス技術を用いたサービスの提案を行ってもらったが、非常に積極的かつ上手にプレゼンをするのに驚いた。マスターの学生でも最初はこうは行かない。

2 年目である 2009 年は、少し反省してスライドの数を減らした。また、出向先の関係で、

政策プロセスをかいま見た経験を学生にも味わってもらいたいと思い、総務省の2011年度の技術政策に関する概算要求を取り上げた。最後に、学生には政策を提言してもらった。技術政策には技術を育成し、産業の旗頭を育てていく面、我々の生活をそれによって豊かにする面、そして、競争によって産業や技術を強くしていく面と多数の stake holder が関わり、利害が相反する面が必ずある。こういう題材はグループ学習に向くし、学生も乗ってくる。時間の関係で議論は途中で打ち切らざるを得なかったが、筆者が帰った後学生も夜中まで議論をしていたそうだ。

2010年はさらに、それを深めて、大阪大学の本職にも近い、スーパーコンピュータの事業仕分けを学生に体験してもらった。驚くのは、事業仕分けに関するほとんどの資料がインターネットで手に入ることで、おかげで臨場感のある議論を行うことができた。新聞等で話題になったこともあり、学生の興味も上々、また、政治と平行して議論を行うことができて面白かった。筆者の方もなれてきたので、あえて技術と政治という分離融合的なテーマを取り上げ、学生のチームワークを生かせるようにした。

本プログラムは筆者に刺激を与えてくれた。折しも、サイデル教授をはじめとしてNHKの熱血授業が話題だ。ぜひ、大学院の講義にも生かしたいのだが、これだけの厚いスタッフのサポート、少人数授業、ゆったりと集中できる環境、多方面の専門分野を持つ学生などの準備を行うことは現実的には難しいことも実感した。たまたま、北ヤードにこういう授業が行える空間を作ろうというプロジェクトが始まっており、本プロジェクトの成果を生かしたプログラムが作れないか、日々苦闘している。



挑戦と変化

工学研究科生命先端工学専攻

洪 達超

今から思えば、GP合宿に参加して沢山の方と出会い、自分の視野や経験が広がっていった。その中で素晴らしい仲間に出会い、共にいくつもの企画を考え、実行したことは僕の中でかけがえのない財産として残った。GP合宿をいつも支えていた教職員や活動に協力して下さった方々には本当に感謝している。

このきっかけで、今まで眠っていたものが目覚め、日々の生活に埋もれてゆく自分に新しい目標を発見させることが出来た。合宿で他学部の学生と交流し、議論することで強い刺激を受け、また同じ志を持つ友に出会い、このつながりが未知への挑戦と導いていく。自分たちが学んだことをより多くの学生に伝えたいという思いが生まれ、グループを形成し、多くのイベントが大学の学内外で開催され、今感じている閉鎖的な雰囲気を変えようと動き出す。

実際に様々なイベントを企画し、実行することを通して、「知る」、「考える」、「実践する」というサイクルが重要であることに気づいた。最初に新しいことを知って、それによって考えさせられ、その結果として行動に移り、実践することでまた新たな経験を得られる。たとえ実践で失敗しても、それを知ることこそが、貴重な経験となり、サイクルを循環させる。合宿では、新しい知識や考えを知ることが出来る。また、異なる学部の学生や普段コミュニケーションする機会がない教職員と議論し考えることが出来るが、合宿は特殊な場であり、本来の生活空間に戻ると、当初抱いた強い意志を実践まで結び付けるには高い障壁を越えなければならない。周りの友達、合宿に参加してない人に同じ経験を伝えることはほぼ不可能に近く、共感してもらうことすらも難しい。いつもの日常に逆戻り、結果として、モチベーションが急激に下がってしまう。これを防ぐのはチャレンジングな課題である。如何に普段の生活で継続した意志を持ち、実践してゆくか、が重要である。一回のイベントを実施し、それに満足して新しいことを止めることは、せっかく実践して得られた経験を最大限に発揮することが出来ず、固定された領域を出ない。次につなぐ役割を忘れてはいけない。継続できなければ、変化は起きず、常に容易に楽な方に流れてしまう。つまり、一つの組織、グループが限界に直面したことと同じことである。他の組織と協力連携し合い、定着させることが必要となり、これが新しい発展の基礎として築かれる。合宿に参加した人は現在、様々な活動に関わり、大学や地域に大きく貢献しているが、多くはその継続性と向き合うことを強いられている。一つの挑戦的な試みとして、学生が主体的に合宿を企画運営することであり、自分たちの成長を発信すると共に、今後の人材育成

を継承することに繋がる。また、学内外のネットワーク構築への展開が可能となる。

そして、もう一步踏み出し、包括的な活動およびその支援も必要とされている。より多くの人にいろんなことを、「知る」きっかけ、「考える」場、「実践する」ことが可能な環境を作ることである。それに向けての情報共有、交流促進およびネットワーク構築のために、学生や教職員、地域の方々など立場に左右されることなく、交流できる場や意見、議論ができる交流会を定期的に運営し、また継続的に様々なプロジェクトを企画することに至った。さらに、大学や市民・国際社会が直面している課題に対して多様な視点を持ってアプローチを試みる学生団体、大学組織、市民団体やNPO 団体などの種々のグループが、互いの活動への協力や連携を可能にするネットワークを構築し、独創的なソリューションを提示し、新しい価値を創り上げることを試みる。

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムに参加して

人間科学部人間科学科

前田 有香

大阪大学学生支援 GP 主催の「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムのよいところは、とても実践的であることだと思う。決して、「リーダーシップ論」を学ぶ場ではない。私は、今まで参加者として全3回このプログラムに参加し、4年目にはメンターとして参加した。1年目は、このプログラムの意図がまったく掴めないまま、頭の中がぐちゃぐちゃになっていたことを覚えている。プログラムの内容は、いろいろな分野の話聞き、与えられた議題についてグループで議論を行うということの繰り返しであった。講義の内容はとても興味深いものであったが、リーダーシップの「リ」の字も出てこない。その年は、真剣に議論できる仲間ができたことが唯一実感できた収穫であった。2年目も1年目と同様、頭の中はこんがらがったまま。3年目になって、以前よりも多角的なものの見方ができるようになったのではないかと感じ始めた。講義の1つ1つはとても専門的であり、それ単独ではどう役立てていけばよいのかわからなかったが、その積み重ねによってさまざまな知識ともものの見方が蓄積されていたのだと感じたのである。その後、4年目にはメンターとして1年次のプログラムに参加し、自分の成長を顕著に実感することができた。

リーダーシップ養成プログラムと聞いて、当初は、理想のリーダー像に関する話を聞いたり、リーダーシップをとるためのテクニックを学んだりする場であると思っていたが、今ではそのようなものはあまり意味をなさないのではないかと感じている。リーダーシップはとても流動的なものである。その場その場に応じてグループを盛り上げ、グループが行き詰った時には鋭い視点で道を切り開くことができる経験と知識を蓄積させていくことこそがリーダーシップをとるために必要なのではないかと思う。その経験や知識というのは人それぞれであるから、理想のリーダー像というのも人それぞれでよいと思うし、ここに記す私の考えも、私個人の感想に過ぎない。このプログラムはとても実践的で、今後自分なりのリーダーシップを身につけていくための手がかりを与えてくれたと思う。もし、今後同じようなプログラムを行うとすれば、大学外の人、特に地域住民の方々などを交えて行えば、より実践的でおもしろいのではないかと思う。

このプログラムを通して私はもっといろいろな人と交流したいと考え、北は仙台、南は鹿児島まで、さまざまな土地を一人旅した。その経験も今の私の糧となっている。来年度からは社会人になる。踏み出した先は、未知なことであふれかえっていると思う。それでも、このプログラムで得たことを活かし、今後も積極的に自分の足を運んでいろいろな人に会い、分野問わず幅広い経験を積んでいきたいと思う。そして、誰からも慕われる人になりたい。それが今の私にとって、理想のリーダー像である。

学生支援 GP の関係者の方々、講師の方々、また、出会った仲間たちに、心から感謝しています。ありがとうございました。

学生支援プログラムから学生部事務職員が得たもの

大阪大学学生支援プログラム事務担当
国立大学法人大阪大学 学生部キャリア支援課長
脇 成吾

私が「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムに関わることになったのは、学生部キャリア支援課長を拝命した平成21年4月に遡る。このプログラムがスタートして3年目に入った時で、このプログラムの趣旨・目的などを十分に理解できないまま流れに身を任せていた。そんな折、就職活動とは関係なさそうな学生たち2,3人がキャリア支援課に出入りするようになった。聞けば、その年の5月に学内で行われる「いちよう祭」のイベントの準備のためとのことであった。当時は、その後、彼らが私の中にキャリア・イノベーションをもたらすことになるとは思ってもよらなかった。

このプログラムは「多様な学生に多様な支援」をするという学生支援の基本理念のもと、学生を信頼し自主性を重んじるとともに責任自覚型教育の中でパートナーシップを高めることを基本的な目標とし、気付き型、実践型の参加者主導の対話型プログラム、メンター制度の構築及び学生部事務職員の積極的関与を主な特徴としている。

本稿では、このプログラムから学生部事務職員が得たものを振り返りながら、その成果や今後の課題についても述べたい。

本学がこのプログラムに採択されたことによって、学生部事務職員一特に実施事務を担当したキャリア支援課職員一が経験できた主なものとして次のようなものが挙げられる。①企画、運営のためのスタッフミーティングの開催事務、②合宿会場担当者、担当講師、参加学生等との連絡調整、③ファシリテーターとして参加、④合宿後の学生の活動（「いちよう祭」イベント参加、報告会、総長ラウンド、ビジョン・ナビゲーション・セミナー、交流会など）のフォロー、などである。なお、2年目までは、民間コンサルティング会社の協力を得ながらチームビルディングのセッションを担当したが、3年目からはキャリア支援課の主導で担当したことにより、プレゼンテーションの基礎を学ぶことができたことは貴重な経験となった。

また、合宿研修にファシリテーターとして参加した他の学生部事務職員からは、①カウンターをはさまずに直接学生と話し議論することができたことで、「学生のニーズ」に対するバイアスを取り除けた、②一つひとつの授業が本当に考えさせられる内容で参加している学生がとても真剣だった、③普段学生と接する機会は少なかったが、学生の視点にたった意識を持てたと思う、④学生が持っている「教育像」や「職員像」を知ることができ、具体的にどうして欲しいかということを知ることができた、などの感想が寄せられた。

これら合宿研修に参加した事務職員が、合宿の経験を活かし、合宿後の学生の種々の活動等を積極的に支援していくことにより学生との信頼関係を構築できることになれば、学

生関係事務に従事する者にとってかけがえのない財産となると考える。

4年間のプログラムを終了するにあたり感じることは、この合宿研修は学生『共育』の原点ではないかということである。なぜなら、日常生活を離れ合宿研修に参加した学生、事務職員、教員、学内外の講師等が共に学び合う時間と環境を共有できたからである。結果として、合宿に参加した学生が、自己を知り、他者を知り、社会を知り、仲間にめぐり合える機会を得て、「自信」、「勇気」、「誇り」を持って社会に巣立っていく「力」を身につけてくれると信じている。

今後の課題としては、このプログラムを大阪大学のキャリア形成教育やFD/SDの一環としてどのように位置付け根付かせていくか、また、学生支援ステーションと参加学生との連携の充実が挙げられる。さらには、留学生、障害のある学生や卒業生、並びに地域住民等の参加もできるものにし、『共育』の実践を行える形にすることが求められる。

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」に立ち上げから関わって

株式会社リンクアンドモチベーション

シニアコンサルタント 檜原 洋平

2005年の冬に本プロジェクトのリーダーである大和谷先生とお会いしてから6年の歳月が流れている。最初は、とにかく大阪大学の学生支援のあり方を一変するような「面白い」ことをしようというところから話は始まった。「モチベーションの低い学生のボトムアップ支援」「3年生の新しいキャリア支援」「ポスドクの支援」・・・など、様々な切り口で議論をしたものの、互いに「じっくり」こず、悶々としていた日々。そして、「やる気のある学生」に応える施策、大阪大学の中で学生に影響を与えられるような施策、そう「大阪大学らしいリーダーシップ養成支援」というテーマで意気投合したときの爽快感と高揚感はいまでも忘れられない。

ただ、本当に大変だったのはそれから。何よりも一番大変だったこと。それは、企業研修では、講師側に「伝えたいこと＝答え」が明確になり、その「答え」をいかに効率的・効果的に訴求するかが重要となる。しかし、本プロジェクトにおいてはその「常識」が全く通用しなかった。「答え」は学生の数だけあってよい。大切なのは、「考えること」であり、「自ら『答え』を見出すこと」、「自分の『答え』を相対化・客観化すること」。これが大和谷先生を中心とする大阪大学の教育スタンスであった。だからこそ、自分が企業研修の流れの中で培ってきた「常識」を捨て、新たなスタンスで臨むことが求められた。

いま振り返ると、大阪大学のこの教育スタンスは理にかなっている。なぜなら、いまの社会は先が見えない社会であり、不確実性があふれ、また変化のスピードも極めてはやい。誰も「こうすればよい」という明確な「答え」を持っていない。だからこそ、社会をリードするリーダーには、「答え」のない問題に真正面から向き合い、必死に考え、自ら納得できる「答え」を見出す「力」が不可欠といえる。

企業の採用担当者と話をしていても、求める人物像については様々な言葉を使うものの、その本質は「自ら考え、自ら行動し、結果を出せる人であり、かつ他人とコラボレーションできる人」。その意味でも、大阪大学の着眼点は、社会の趨勢をふまえているといえる。

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」の最大の特徴は、「リーダーシップ養成支援」でありながら、プログラムの中で「リーダーシップ」について直接的に考える機会を用意していないことにある。所謂経営学の権威の講義はひとつも存在しないのである。代わりに、大阪大学の内外の一流の講師が投げかける「答え」のない「問い」。その範囲は「哲学」から「医療」「経済」「都市」「芸術」「工学」まで実に幅広い。その「問い」に対して、個人で、チームで長い時間必死に向き合う。その中で、培われる「考える力」「他人と学び合う力」「コラボレーションする力」「仮説を打ち立てる力」「未来を描く力」。このようなスタイルは、効率的に「答え」に到達する方法を身につけ、小さくまとまりがちな学生の「頭」をぐちゃぐちゃにし、「視点」を広げるには極めて効果的であった。

大阪大学の「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」は、「リーダーシップ」開発の新しい形であり、可能性であり、大学が提供する「ならでは」のプログラムと言える。そして、何よりこのプログラムの出身者が、その後様々な「仕掛け」を行い、大学内で、地域で、社会で新たなムーブメントを起こしていることが、プログラムの品質を証明する最大の材料ではないかと想っている。

私個人としても、大阪大学で4年間新たな取り組みをし、そこで得られた知見は大変貴重なものであった。ここで得た知見を、他の大学に対して提供していきたい。また、是非、この4年間で培ってきたノウハウを大阪大学だけに留めるのではなく、日本の、世界の未来を担うリーダーシップ養成のために活かして頂きたいと心から願う。

今後の展開

来年度以降の展開

最終年度を迎える「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムの今後の展開を考えるにあたり、本年度の合宿研修に参加した学生、協力担当講師及び学生部事務職員を対象に実施したアンケート結果をもとに検討を行った。アンケートでは、来年度以降も継続して実施してほしいという声が大多数を占めた。

そこで、継続して実施するためには財源の確保が重要課題であったが、本プログラムの質を維持し、かつコスト削減を前提に、4年間の活動状況をもとに学内予算を措置してもらえよう要望していたところ、平成23年度での予算化の目処が付き、併せて実施内容等についても検討を重ねた結果、来年度以降の実施方針を次のようにまとめた。

1. 平成23年度の実施について

プログラム名称を「市民社会におけるリーダーシップ養成支援研修」とし正課外活動とする。実施主体は学生支援ステーションと学生部が担当し、学生の夏期休暇期間中の9月に実施する。実施形式は、平成22年度の3泊4日を1泊4日に変更し、実施経費の見直しと教職員及び協力担当講師のアクセスを勘案し、学内施設で2日間、学外施設で1泊の合宿を行うこととする。

なお、1年次～3年次学生の合同開催及び4年次学生のメンター参加により、学年を横断することで従来の懸案事項であった学生が築いた文化・風土の継承を図っていく。また、実施内容については、参加学生が自ら企画・運営するものを取り入れるほか、市民団体等の参加により、学生の市民性をより一層向上させることを目指していく。

2. 平成24年度以降の実施について

平成23年度から専任教員が配置される学生支援ステーションの進路相談ユニットが中心的な役割を担い、平成23年度において変更実施された点について、卒業後の活動のモニタリングを含めたプログラムの質の検証を行う。また、学生支援ステーション及び学生部担当課は、正課科目との連携を図る学生支援部門として、キャリア支援の観点からリーダーシップ養成支援プログラムの取り組みを発展させていく。本プログラムは、主に学部学生を対象にしたものであるが、学内で既に実施されているリーダーシップ関連プログラム（計画中のプログラムを含む。）との連携を図ることで、「阪大スタイル」に基づいた人材育成の体制をさらに整備していく予定である。

おわりに Discoveries：さらなる未知への旅の始まり

国立大学法人大阪大学 大学教育実践センター 教授

木川田 一榮

四年間。学生たちと教職員との未知への航海の旅は、じつに短く感じられた。一方、参加学生一人ひとりには、快活で頼もしく、逞しく成長した姿を私たちにみせてくれている。この年々成長していく姿そのものが、本プログラムの何よりの成果の証となっていると確信している。成長したのは、学生ばかりではなかった。参加した教員たち、支援した職員たちも、学生たちとの議論や対話、インフォーマルで親密な交流のなかで、また毎回のプログラム・レビューを通して、今までの在り方を改める多くの気づきを得ることができた。ここでは、教職員も学生たちと共に学び合う、善きパートナー同士となった。

本プログラムは、参加した学生たちにとって、未知との出会いによる「気づき」と「発見」、そして身につけたものを日常の社会活動として展開していく実践的経験の場であった。いわば、それは学生たちにとって、未だ経験したことのない世界への航海の旅であった。本プログラムの巷のリーダーシップ教育と異なるところは、「市民社会におけるリーダーシップ」と「阪大スタイルのリーダーシップ」という独自の学風や教育目標に、こだわりを持ったところにある。これは、将来のリーダー向け教育(Teaching)プログラムではない。すべての人は、社会生活で直面する多様な状況のなかで臨機応変にリーダーシップを発揮することができるという考えに立脚して、養成(Nurturing)プログラムとしてデザインされた。

各々の航海は、多様で多彩なワークショップ型セッションが演出された。学生たちが、「自己と向き合い・他者とかがかわる」さまざまな場面で、自ら気づき、自ら考え、自らの行動につなげる「知行合一」の機会を提供してきた。各セッションの多様な教師陣は、あえて通常の講義を行わず、知の水先案内役(課題提起役)に徹してきた。そのことが、学生たちが主体となって、ワークショップや対話を進めることにより、チームの仲間と共に考え学び合い、阪大の教育目標である「国際性・教養・デザイン力」を実践的に身につけるプログラムとなった。さらに、参加経験学生がメンター(世話役)となつての再参加という善循環方式をとったことにより、後輩たちへの効果的な影響力を見ることができた。

未知への航海の旅では、学生たちにとっての発見は、たんに新しい考えや価値観を発見することだけに留まらなかった。それ以上に意味のあることは、今まで考えもしなかった多様な視点でものごとを観る(Discoveries)という高質な経験知を体得したことにある。研修合宿プログラムを起点として、日常のキャンパス生活や社会生活を通じて、それぞれが新たな出来事を起こし続けている。まるで交響し合いながら、世界に反響していくような新たな出来事が起こりそうな予感がしてならない。これから学生たちが、どんな「夢を創め、世間^{よのなか}を変え、変化を^{たの}適しむ。」のか楽しみでならない。今回の学生支援GPの終わりは、参加学生たちにとっては、市民社会における「さらなる未知への旅の始まり」といえよう。

平成 19 年度 文部科学省選定「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」

市民社会におけるリーダーシップ養成支援 最終報告書

発 行：平成 23 年 3 月 31 日

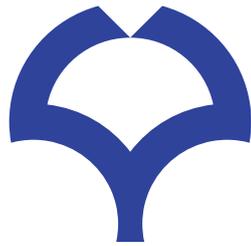
発行者：大阪大学

編 集：大阪大学学生部キャリア支援課

住 所：565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1

06-6877-5111（代表）

印 刷：阪東印刷紙器工業所



OSAKA UNIVERSITY